

# 九州 7 県主要地域における 不快感を表す形容語の枠組み

—— 大学生の実態 ——

山 県 浩\*

## 1. はじめに

[1] 本稿は、沖縄県を除く九州 7 県及び山口県の大学・短期大学に在籍する学生に対して行ったアンケート調査のうち、不快感を表す 5 項目について、九州 7 県における県内の言い方の違い、即ち、県内差の実態を報告することを目的とするものの一つである。

同一の調査に基づく県内差に関する論考として、山県 (2012)・山県 (2014) がある。前者は福岡県の 11 地域、後者は福岡県を除く九州 6 県・山口県の 29 地域について地域差の実態を報告した。両者は、考察の観点を若干異にするものの、いずれも各項目を独立したものとして捉え、地域ごとに諸形式の使われ方、具体的には、回答の多い言い方、少ない言い方を追うことによって県内差を示した。そして、両稿とも 4 章において今後の課題として、項目ごとに独立した地域差でなく、対象項目を横断する全体的な考察、特にある項目がどのような言い方によって専ら言い表されるか、また複数の項目がどのような言い方によってどのように共通して言い表されるか、その結果、対象 5 項目がどのように区分されるかに基づく地域差を明らかにすることを挙げた。

---

\* 福岡大学人文学部教授

本稿は、このような観点に基づいて福岡県内の諸地域や九州7県の主要都市における項目の区分に関する地域差を考察、報告するものである。

〔2〕項目の区分に関する地域差は、山県（2011・12）の一部で九州7県と山口県を中心とする8県について県単位で報告した。

山県（2011・12）では、山県（2012）・山県（2014）と同じく項目ごとに諸形式の使われ方を示して各県の特徴を記述した上で、4項目の区分のあり方によって対象9県が〔福岡県・長崎県〕〔佐賀県〕〔熊本県・鹿児島県・山口県〕〔宮崎県・大分県〕〔広島県〕という5グループに分かれ、福岡県は対象諸県の要の位置にあることなどを明らかにした。

しかし、本稿などの依る調査は、元来、九州7県及び山口県における細かな地域差を明らかにすることを目的に準備したものである。この点で、山県（2011・12）で示した各県の特徴は、県内差の有無やあり様を測るための基準であった。従って、山県（2012）・山県（2014）は、ある観点による県内差の報告として山県（2011・12）の各論の一つに当たる。本稿も、同じく5項目の区分のあり方という観点による県内差の報告として山県（2011・12）の各論の一つである。

〔3〕西日本地域における不快感を表す言い方に関する研究は、陣内（1990）など少なくない。

その全体相は、これまで繰り返し述べた。ここでは、本稿と共通する課題を持つ花岡（2002）につき、山県（2011・12）・1章〔31〕項と重複するところがあるものの、略述する。

花岡（2002）は、疲労感を表す「意味枠」を設ける。「意味枠」とは、中立枠を含めて、疲労感が問題となる「身体」「精神」の軸と「統制可能」「統制不能」の軸で区分される4枠に加え、各軸で両方の性格を持つ（同時に両方で使える）「中立枠」5枠からなる。これら計9枠は、疲労感を体系化したもので、世代差や地域差を捉える枠組みとして一つの基準となりうる。

資料は、広島県大竹市方言の中年層20名に対する、11種の質問文（「悪いことをして怒られるのは（ ）。」などの空白部の補充式）を用いた、一対一の面接調査によって得られたものである。そして、回答された言い方のうち、〈タイギー〉を初めとする6語が取り上げられ、語ごとの回答状況が先の9枠ごとに回答数で示される（p.7・表3）。9枠の中で、最も回答の多い枠が「中心的意味」と判断され、それぞれ説明される。例えば、「統制不能・可能に関わらず、精神的な疲労感については「センナイ」がほぼ専用されており、身体的な疲労については「ヤネコイ」「ナンギナ」が統制不能、「エライ」は統制可能の意味枠を中心に、「シンドイ」は統制不能・可能の両方をカバーしている」（花岡（2002）p.7）など。

一方で、表3に依ると、言及されていないが、「シンドイ」は、回答が少なく、周辺の意味となる「身体・統制可能」の枠で「エライ」の中心的意味と重なり、「ヤネコイ」と「ナンギナ」の中心的意味は、上記の如く「身体・統制不能」で重なるが、回答の少ない周辺の意味では違いが見られる。

これは、疲労感という一定の意味の枠内に存する諸形式に意味の重なりが存在することを物語る。具体的な回答状況として、ある質問文「朝から晩までよく働いたので体が（ ）。」では13名がXという言い方、8名がYという言い方を回答する一方、別の質問文「あの仕事は体が（ ）から、いつもいやになる。」では16名がYという言い方、6名がXという言い方を回答するなどである。

[31] 本稿も、同じく不快感という抽象的な意味で共通する5項目を対象にする。

ただ、花岡（2002）の如く、体系的・網羅的でなく、「統制」の可・不可、「身体」か「精神」など、一定の軸によって項目が整理できるものでもない。

2章[3]項の如き階層は考えられるものの、項目間の用法上の遠近関係は均等でない。しかし、不快感という一定の意味の枠内に存するため、ある言い

方がある項目で最大の回答を有する一方、別の項目でも一定の回答を有する、また別の言い方が別々の項目でピークの回答と一定の回答を有するなど、幾つかの言い方が複数の項目で様々な回答状況を示す。

このようにある言い方が複数の項目でそれぞれ一定の回答を有する、いわば、特定の言い方で項目の重なりが存するにも関わらず、山県（2012）・山県（2014）では、この点を考慮せず各項目を独立したものと捉えて考察を行った。しかし、類義的な複数の項目を扱う以上、項目相互の関連に配慮して地域差を考える必要がある。その配慮の仕方の一つとして、山県（2011・12）では、対象4項目がそれぞれどのような言い方によって専ら言い表されるか、また複数の項目がどのような言い方によってどのように共通して言い表されるかを基準にして対象諸県の県差を示した。

本稿も基本的には山県（2011・12）と同一の観点で福岡県内の諸地域や九州7県の主要都市における対象項目の区分のあり方にどのような違いが見られるかを考察、報告する。

[32] 本稿を初めとする一連の論考では、不快感を表す諸形式の使われ方によって県差や県内差を検討してきた。

しかし、地域語に関する研究として、県差・県内差など、「地域の分類」を最終目的とする訳にはいかない。この分類は、どのような言い方の、どのような使われ方に基づくかなど、分類に至る過程や分類の根拠をことばの問題として説明しなければならない。また結論となる「地域の分類」が当該地域のことばの歴史とどのような関連を持つかも考えなければならない。これまでの論考でも、これらの点に注意を払い、地域語の実態を論じるよう努めた。しかし、本稿の場合、区分に関わる主要な言い方7語に限定しても、その用法に言及する余裕がない。そこで、地域による用法の違いを問題とするのは、本稿を踏まえた別稿にすべて譲る。<sup>○注(1)</sup>

[4] 山県（2011・12）では、九州7県及び山口県を中心にして項目の区分の

あり方に基づいて県差を報告した。

ただ、実際は、全体の回答者数が 30 名に留まる広島県を他 8 県と対等な 1 県として扱った。このため、山県（2012）・注(1)では、広島県を対象とした問題点を指摘した。ただ、今に至っても、山県（2011・12）での扱いが根本的に間違っていたとは考えない。これまでの論考でも述べたが、アンケート調査に基づいて地域差を論ずる場合、単位となる「地域」は、回答者が何名であれば妥当か、地域として成り立つかなどは、簡単に判断できない。

また何名以上を有効とするかによって検討できる地域差が異なることも無視できない。詳細は、2 章に記すが、本稿では、回答者 25 名以上の 18 地域を対象にする。このため、県内差は福岡県でしか検討できない。福岡県以外の九州 6 県は、宮崎県が 1 地域、他 5 県が 2 地域に止まる。そこで、本論である 3 章の構成は、次の如くとする。

31 章では、福岡県の 7 地域によって県内差を検討する。完全でないが、県内のほぼ全域が対象にでき、県内差の実態が考察できる。32 章では、福岡県以外の九州 6 県の県庁所在地について、これまでの論考で得られた結果との比較によって県内での位置付けを行った上で、福岡市・北九州市を含めた九州 7 県の 8 主要都市における項目の区分に関する地域差を考察、報告する。

## 2. 調査の概要

[1] 本稿の依る調査は、2007 年 10 月から 2008 年 4 月にかけて行った。

調査対象は、九州 7 県及び山口県に所在する大学・短期大学 16 校の在学生在で、1,760 名から回答を得た。これらのうち、一定の条件を満たす 1,514 名を有効回答者として検討対象とした（詳細は、山県（2009a）・山県（2009b）・山県（2011・12）のいずれも 2 章参照）。

そして、当該 8 県で県内差を検討するため、平成の大合併以前の市郡に基づいて当初 37 地域を設定した。しかし、回答者が存しないため、予定しながら

設定できない地域が2地域存在した（熊本県東部＝阿蘇地域、鹿児島県種子島・屋久島地域）。従って、8県で都合35地域が対象となる。

これら35地域の回答者は、139名の福岡市から3名の五島・天草・周防東部まで様々である。少ない場合、何名までの地域を対象とするか難しい。項目別に地域差を検討した山県（2012）・山県（2014）では9名以上の回答者を有する29地域を対象とした（福岡県＝11地域、佐賀県＝4地域、長崎県＝4地域、熊本県＝4地域、大分県＝5地域、宮崎県＝4地域、鹿児島県＝5地域）。

しかし、本稿の場合、原則として一定の回答率以上であれば、対象となる言いかた方を等しく扱う。このため、1・2名の回答ミスが全体の回答率に影響を与えるような少なさは問題である。<sup>○注(2)</sup> 一方で、基準とする回答者数を高めに設定すると、対象となる地域が限られ、地域差が検討できない。

そこで、県庁所在地で最も回答者の少ない宮崎市26名を対象とするため、回答者25名以上を条件とした。これが妥当かの問題もあろうが、該当する18地域は、次の如くである（全体の回答者数に加え、（ ）内に「男性/女性」の順で各性の回答者数を示す）。

なお、18地域の平均回答者は50.3名で、これ以上の人数となるのは、県庁所在地では、福岡市・長崎市・大分市・鹿児島市、これ以外では、福岡県の筑紫域・北九州市・筑後北部である。

1. 福岡県＝515（222/293）

福岡市＝139（57/82）      糟屋域＝31（14/17）      筑紫域＝67（31/36）

北九州市＝66（31/35）      筑豊西部＝29（12/17）

筑後北部＝64（30/34）      筑後南部＝43（15/28）

2. 佐賀県＝98（30/67・性別不明1）

佐賀市＝30（6/24）      東部＝27（10/16・不明1）

3. 長崎県＝169（31/138）

長崎市＝54（10/44）      中部＝36（5/31）

4. 熊本県 = 135 (50/85)

熊本市 = 47 (16/31)          北部 = 34 (14/20)

5. 大分県 = 163 (23/140)

大分市 = 61 (7/54)          中部 = 41 (6/35)

6. 宮崎県 = 70 (28/42)

宮崎市 = 26 (8/18)

7. 鹿児島県 = 217 (35/182)

鹿児島市 = 82 (9/73)          薩摩南部 = 28 (3/25)

なお、地域ごとの在籍大学・短大の回答者数など、基礎データは山県（2012）の表-1 や山県（2014）の表-1~3 を参照のこと。また各地域の回答者は、小学校・中学校・高等学校の 12 年間当該地域で過ごした者である。このため、小学校入学以前に他県・他地域に在住した者を含むことになるが、ごく少数である。

[2] 福岡県は、山県（2012）で県内差を検討した 11 地域の約 6 割を占める 7 地域（回答者数は県全体の 85.2%）を対象とする。

県内各地の主要な地域を網羅しているので、項目の区分のあり方に基づいた県内差の記述が可能である。また併せて山県（2012）に示した**共通語的形式・地域固有形式**を中心に検討した県内差の実態と比較することも可能である。

福岡市・北九州市以外の地域に含まれる市町村は、山県（2012）・注(3)などを参照のこと。

一方、他 6 県では、1 地域の宮崎県を除き、県内 2 地域を対象とするに留まる。その 2 地域も、県庁所在地とそれに隣接する地域である。山県（2014）で述べた如く一部を除くと地域差の小さい地域どうしである。

各県庁所在地については、山県（2011・12）で示した県全体の区分のあり方などとの比較を行う。これによって県内での位置付けを行い、県全体のあり方が意味するところを再考する。これは、県全体の回答者に占める県庁所在地の

回答者の割合が、最も低い福岡市で 27.0%、最も高い鹿児島市で 37.8% となり、県全体のあり方がこれらの都市の傾向を反映している可能性が高いためである。<sup>○注(3)</sup>

福岡県・宮崎県以外では、県庁所在地に隣接する 5 地域について、県庁所在地の位置付けのため、比較・検討する。ただ、隣接地域の扱いには注意が必要である。例えば、本稿でも扱う佐賀県東部は、3 市・2 郡からなり、この中でも地域差が見られる（山県（2014）・注(5)参照）。即ち、一般に県庁所在地以外の地域は、広域で、その中に地域差が存することがある。この点でも、内部差が小さいと考えられる県庁所在地で地域差を検討することは妥当である。

なお、（ ）内に示した如く、地域単位でも男女のアンバランスは顕著で、長崎県・大分県・鹿児島県の 6 地域では男性の割合が 10% 台となる。しかし、紙面の関係もあり、男女の違いには一切触れない。

〔3〕調査項目は、所定の質問文に対して、18～27 種の言い方を選択肢として示し、地域で使われている言い方の最も現れやすい場面（家族と話をするとき）で使う言い方すべてを回答（選択）する形式である（調査資料は、山県（2011・12）に示した）。

本稿の依る調査において、不快感に関する項目は、次の 5 種である。

項目 1；前髪が目にかかるときの気持ち（略称。前髪掛かり）

項目 2；長雨が降り続いたときの気持ち（略称。長雨続き）

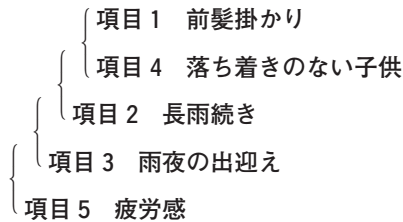
項目 3；雨夜の出迎えのときの気持ち（略称。雨夜の出迎え）

項目 4；落ち着きのない子供たちが気になるときの気持ち（略称。落ち着きのない子供）

項目 5；働き過ぎによる疲労感（略称。疲労感）

これら 5 項目は、不快感の性格や原因など、即ち、用法によって、次の如き階層をなす。<sup>○注(4)</sup>





本稿では、これら5項目がそれぞれどのような言い方によって専ら言い表されるか、またどの項目とどの項目がどのような言い方によって共通して言い表されるかなどを地域ごとにまとめ、その積み重ねの上で福岡県内の諸地域や九州7県の主要都市に見られる地域差を示す。

なお、これら5項目の限りでは、不快感の性格や原因などに基づく体系だった区分のように見える。しかし、体系的・網羅的に不快感を捉えようとする場合には、項目が少なく、粗い。項目数を増やして現地調査を行うことが今後の課題である。またその中で花岡（2002）の如く「統制」の可・不可、「身体」と「精神」の2軸に依る「意味枠」を設定することも必要である。

### 3. 調査結果・考察

〔1〕本章では、2章の調査によって得られた九州7県18地域のデータに基づいてどのような言い方によって不快感を表す5項目がどのように区分されるかを検討し、福岡県内7地域と九州7県の8主要都市に見られる地域差を報告する。

併せて、福岡県内における地域差は、山県（2012）の結果と比較を行う。これは、同じデータに依るが、項目ごとに検討したもので、本稿とは観点を異にする。異なる観点によって地域差を検討することによって、地域語の実態を多角的に把握する。

〔2〕山県（2012）を踏まえるため、対象とする代表的な言い方は、注(2)ですでに述べたが、対象地域それぞれにおいて回答率が30%以上の《一定の回

答率を持つ、安定した言い方》である。

これまでの論考では、回答率 20～29% の言い方に言及して地域差を考えることがあった。同じく本稿でも 30% 未満の言い方に触れることがある。<sup>○注(5)</sup>

論末に資料として、本稿で対象とする 18 地域別に 5 項目それぞれ 30% 以上の言い方を示した。これら以外の言い方は、山県（2012）の別表—11～51・山県（2014）の別表—12～54 を参照のこと。

[21] 資料に示した言い方のうち、下線を施したものが複数の項目で回答率が 30% 以上となる言い方で、本稿で中心的に扱う。

例えば、福岡市の場合、〈ウザイ〉と〈ウットーシイ〉が該当する。これは、いずれも項目 1・2・4 で 30% 以上の言い方として共通して使われるためである。そこで、これら 2 語によって項目 1・2・3 が一体化すると捉える。項目 3 や項目 5 で 30% 以上になる言い方は、それぞれの項目だけに見られるもので、他 4 項目では 30% 未満である。そこで、福岡市は、5 項目が項目 1・2・4 と項目 3 と項目 5 に 3 区分されると考える。

一方、糟屋域は、項目 1・2 が〈ウザイ〉で一体化するとともに、項目 1・4 が〈ウットーシイ〉で一体化して、結果的に福岡市と同じく項目 1・2・4 がまとまりをなす。更に項目 3・5 が〈ダルイ〉で一体化するため、5 項目が 2 区分されると考える（これらを図式化したのが、論末の図—1～7）。

以上の如き手順で《ある項目がどのような言い方によって専ら言い表されるか、また複数の項目がどのような言い方によってどのように共通して言い表されるか》という使われ方の実態に基づいて、5 項目の区分のあり方が地域ごとに定められる。

この場合、例として示した 2 地域は、福岡市は [項目 1・2・4 対 項目 3 対 項目 5]、糟屋域は [項目 1・2・4 対 項目 3・5] という区分のあり方をなすとまとめる。

[22] 論を進める際、ある項目がある言い方によって専ら言い表されることよ

りも、複数の項目がどのような言い方によって共通して言い表されることの方に重点を置き、項目の重なり、即ち、どのような言い方がどの項目とどの項目で共通して30%以上の回答率を有するかを重視する。

そして、このような重なりが地域によってどのように異なるかを中心にして地域差を考える。ただ、この違いは重なりをなす言い方の用法が地域によって異なることが背景にある。ことばの研究として、地域差を問題とする本稿は、あくまでも一つの前段階であり、問題となる7語の用法は別稿で考察する。

〔3〕対象とする九州7県18地域において、複数の項目に跨がって回答率が30%以上となる、即ち、項目の重なりをなす言い方は、次の7語である。

後の数値は、複数項目で30%以上となる地域数である（全18地域）。〈ウザイ〉はほぼすべての地域、〈シャーシイ〉〈ヤゼイ〉は1地域に限られる。

〈ウザイ〉=14	〈ウットーシイ〉=12	〈ダルイ〉=8
〈セカラシイ〉=3	〈ヨダキイ〉=3	〈シャーシイ〉=1
〈ヤゼイ〉=1		

これまでの論考では、九州7県及び山口県・広島県における全体的な使われ方から**共通語的形式・地域固有形式**を定め、地域差の検討で一つの基準とした。<sup>注(6)</sup> この場合、上記7語のうち、〈シャーシイ〉以外は、いずれかの形式に該当する。また、この2形式は、規定の条件から、上記の地域数と対応し、8地域以上の〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉〈ダルイ〉は**共通語的形式**、3地域以下の〈セカラシイ〉〈ヨダキイ〉〈ヤゼイ〉は特定の県の**地域固有形式**である。

〔4〕本章は、2部構成で、**31章・32章**で異なる地域差を検討する。

その際には、前項で説明した項目の区分のあり方に加え、対象とする言い方の回答率を考慮した新たなデータに基づいて地域差を検討する（後掲、15頁・表-1）。

**31章**では、福岡県内7地域につき、複数のデータに基づいて地域差の実態を示す。併せて別の観点で県内差を報告した山県（2012）の結果と比較する。

32 章では、福岡県以外の九州 6 県 11 地域につき、31 章に倣って全体的な傾向を捉え、県庁所在地の 6 都市について山県（2011・12）で示した県全体のあり方や山県（2014）・4 章〔3〕項で示した特徴・性格と比較をして、県内での位置付けを行う。そして、福岡市・北九州市を含め、都合 8 主要都市に見られる地域差を検討する。

以上、いずれでも対象 5 項目がどのように区分されるか、更にその区分に関わるのはどのような言い方であるかなどを地域ごとに記述し、相互に比較することによって地域差を示す。

### 31. 福岡県内諸地域の実態

〔1〕福岡県で対象とする 7 地域は、福岡市、その周辺域の糟屋域・筑紫域、北九州市、筑豊西部、筑後北部・筑後南部で、ほぼ全県を網羅する。

ただ、純粋な豊前域である筑豊東部・京築域を欠く。両地域とも回答者は 10 名前後に留まるため、25 名以上という条件から大きく外れ、対象に出来ない。

当該 7 地域において対象 5 項目で 30% 以上となる言い方とその回答率は、論末・資料の如くである。これに基づいて項目の重なりを図式化したものが、論末・図-11～17 である。

山県（2012）では、5 項目ごとに代表的な言い方の使われ方によって福岡県内 11 地域の地域差の実態を記述した。そして、項目ごとの地域差を通したり、県全体のあり様と比較したりして、福岡市・北九州市は、全体的に偏差が小さく、県内で最も平均的であり、一方、筑後北部・筑後南部は、多くの項目で偏差が大きく、特異性が際立つとまとめた。

これに対して、本稿は既述の如く異なる観点で検討するものである。これによって異なった地域差が見えてくるかもしれない。逆に同じ地域差が見られることもあろう。この場合は、本稿の依る調査の限りながら、普遍性を持った地域差の実態を示していると言える。

[2] 山県（2011・12）と同じ原則によって福岡県 7 地域ごとに 5 項目の重なりをまとめると、区分のあり方は次の如く 3 分類される。

## Ⅱ類

糟屋域；項目 1・2・4 対 項目 3・5

筑豊西部；項目 1・2・4 対 項目 3・5

筑後北部；項目 1・2・3・4 対 項目 5

## Ⅲ類

福岡市；項目 1・2・4 対 項目 3 対 項目 5

筑後南部；項目 1・2・4 対 項目 3 対 項目 5

## Ⅳ類

筑紫域；項目 1・2 対 項目 3 対 項目 4 対 項目 5

北九州市；項目 1・2 対 項目 3 対 項目 4 対 項目 5

これは、項目の重なりを大きく捉えてまとめるという原則に依る分類である。このため、3 項目以上をまとめる場合、個々の項目の重なり方は一様でない。

[21] 5 項目を 2 区分する Ⅱ類は、糟屋域・筑豊西部と筑後北部で項目の組み合わせが異なる。また糟屋域と筑豊西部の如く同じ組み合わせであっても、重なり方が異なることがある。福岡市と筑後南部は、同じ Ⅲ類で、同じ組み合わせながら、関わる言い方が異なる。

即ち、糟屋域は、〈ウザイ〉が項目 1・2 に共通し、〈ウットーシイ〉が項目 1・4 で共通するなど、項目 1 と項目 4 は直接重ならない。しかし、項目 1 の〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉が橋渡しになって項目 2 と項目 4 が繋がるため、項目 1・2・4 が連鎖して一体化すると考える。これに対して筑豊西部は、〈ウザイ〉が項目 1・2・4 で共通することに加え、〈ウットーシイ〉が項目 1・2 で共通するなど、3 項目が直接まとまる。

福岡市・筑後南部は、ある言い方が項目 1・2・4 に共通する点で筑豊西部と同一である。しかし、共通する言い方が福岡市は〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉、

筑後南部は〈セカラシイ〉の如く異なる。

〔22〕Ⅱ類～Ⅳ類の区分のあり方は、以上の如く山県（2011・12）に倣い、最終的なまとまりがどのようなになるかに基づいて定めたものである。

前稿では、対象としたのが4項目であったこともあり、同じ類の中で項目の組み合わせが異なることはなかった。一方で、どの項目とどの項目がどのような言い方によって共通するか段階を追ってまとめると、より細かな分類が可能である。<sup>○注(7)</sup>しかし、山県（2011・12）で示した県ごとのあり方と比較を行うためにも、この3分類で論を進める。

〔3〕山県（2011・12）では、30%以上の言い方を一律に対象としたため、次の如き問題点を記した。

例えば、佐賀県の〈セカラシイ〉の如く30%台の回答率で複数の項目に共通する場合も、広島県の〈タイギ〉の如く50～80%もの回答率で複数の項目に共通する場合も、同じように扱った。また同じ言い方でも項目によって回答率が異なる。30%以上の回答率で共通することだけでなく、その回答率や項目に固有な言い方の回答率を考慮し、項目どうしの重なり方の違いを踏まえて区分のあり方を示すには至らなかった。山県（2011・12）・4章〔31〕項

この問題を解決する方法として、対象とするすべての言い方について、特定項目だけで30%以上になる言い方と複数項目で30%以上になる言い方に二分して、関係する回答率を整理した（次頁表一参照）。

表の「+」「-」「計」の値は、2タイプの言い方の回答率をそれぞれ合算したものと両者の差である。具体的な言い方の実態は分からず、項目ごとの回答率のあり様が数値化されている。これによって、項目ごとに、他項目でも見られる言い方（「-」の値）が存するか否か、存する場合、その項目だけに見られる言い方（「+」の値）と比べて、多いか少ないかなどが知られる。言わば、項目ごとの独立性の違いが地域によってどのように異なるかが数量化されて

表-1 項目独自の言い方と他の項目と共通する言い方の回答率

地域	項目1；前髪掛かり			項目2；長雨続き			項目3；雨夜の出入			項目4；落ち着さない子供			項目5；疲労感		
	+	-	計	+	-	計	+	-	計	+	-	計	+	-	計
福岡市	43.9	110.8	-66.9	0.0	86.4	-86.4	93.5	0.0	93.5	0.0	61.9	-61.9	195.6	0.0	195.6
糟屋域	48.4	87.1	-38.7	0.0	58.1	-58.1	61.3	35.5	25.8	32.3	41.9	-9.6	100.0	67.7	32.3
筑紫域	50.7	95.6	-44.9	0.0	82.1	-82.1	67.2	0.0	67.2	41.8	0.0	41.8	161.1	0.0	161.1
北九州市	43.9	110.6	-66.7	0.0	71.2	-71.2	101.5	0.0	101.5	30.3	0.0	30.3	157.6	0.0	157.6
筑豊西部	48.3	110.4	-62.1	0.0	82.8	-82.8	93.1	31.0	62.1	41.4	31.0	10.4	117.2	41.4	75.8
筑後北部	42.2	139.2	-97.0	0.0	75.0	-75.0	59.4	34.4	25.0	32.8	34.4	-1.6	182.8	0.0	182.8
筑後南部	107.0	81.4	25.6	0.0	69.7	-69.7	74.4	0.0	74.4	0.0	30.2	-30.2	142.0	0.0	142.0
<b>A</b>															
平均値	54.9	105.0	-50.1	0.0	75.0	-75.0	78.6	14.4	64.2	25.5	28.5	-3.0	150.9	15.6	135.3
標準偏差	21.5	17.8	35.4	0.0	9.0	9.0	15.9	16.7	27.7	16.7	20.6	32.8	31.6	25.6	55.1
佐賀市	73.3	96.6	-23.3	30.0	83.3	-53.3	96.6	56.7	39.9	0.0	40.0	-40.0	163.3	0.0	163.3
佐賀東部	55.6	92.6	-37.0	40.7	85.1	-44.4	63.0	48.1	14.9	33.3	0.0	33.3	129.7	0.0	129.7
長崎市	59.3	96.3	-37.0	33.3	90.7	-57.4	85.2	74.0	11.2	33.3	0.0	33.3	164.7	0.0	164.7
長崎中部	130.6	41.7	88.9	33.3	0.0	33.3	61.1	0.0	61.1	0.0	30.6	-30.6	144.5	0.0	144.5
熊本市	38.3	106.3	-68.0	0.0	65.9	-65.9	100.0	48.9	51.1	74.5	0.0	74.5	161.7	34.0	127.7
熊本北部	0.0	91.2	-91.2	0.0	73.5	-73.5	94.1	0.0	94.1	38.2	0.0	38.2	147.0	0.0	147.0
大分市	70.4	62.3	8.1	0.0	49.2	-49.2	42.6	82.0	-39.4	0.0	34.4	-34.4	81.9	78.6	3.3
大分中部	146.3	0.0	146.3	0.0	39.0	-39.0	73.1	80.5	-7.4	75.6	0.0	75.6	97.6	82.9	14.7
宮崎市	42.3	111.6	-69.3	0.0	100.0	-100.0	77.0	130.8	-53.8	73.1	0.0	73.1	207.6	50.0	157.6
鹿児島市	42.7	43.9	-1.2	0.0	31.7	-31.7	86.6	48.8	37.8	0.0	0.0	0.0	45.1	54.9	-9.8
薩摩南部	78.6	42.9	35.7	0.0	32.1	-32.1	96.4	32.1	64.3	0.0	0.0	0.0	85.7	53.6	32.1
<b>B</b>															
平均値	62.3	84.5	-22.2	7.6	65.3	-57.7	79.2	39.0	40.2	28.1	16.9	11.2	138.1	25.7	112.3
標準偏差	34.2	33.0	62.0	14.4	25.1	28.9	16.8	35.8	42.4	26.4	20.0	40.4	41.7	30.7	65.8

・対象18地域の各項目においてその項目だけに見られる言い方数種（資料で下線の施していない言い方）の回答率の合計値を「+」欄、他の項目でも見られる言い方数種（資料で下線の施してある言い方）の回答率の合計値を「-」欄に記し、前者から後者を引いた値を「計」に記した。

・「+」欄、「-」欄の値が「0」は、該当する言い方が存しないことを意味する。

・A欄の「平均値・標準偏差」は福岡県7地域全体における「+」「-」「計」の値、B欄の「平均値・標準偏差」は全18地域における「+」「-」「計」の値を意味する。

いる。

これらのデータによって、項目ごとに福岡県7地域のまとまりを略述する。その上で5項目を通して7地域がどのようにまとまるか、Ⅱ類～Ⅳ類の3分類とどのような対応をするかなどを検討する。

[31] **項目1；前髪掛かりの7地域（A欄）**の「計」の平均値は-50.1で、このマイナスの値は後述の**項目2**の値に次いで高い。

これは、他の項目でも見られる言い方が多く、その回答率が高いことを意味する。従って、本項目は全体的に独立性が低い。ただ、地域差が見られ、筑後南部は本項目だけに見られる言い方の回答率の方が高く、「計」の値が唯一プラス（25.6）である。

**項目2；長雨続き**は、本項目だけに見られる言い方が7地域すべてに存しない。すべて他の項目でも見られる言い方で、全地域で独立性がない。このため、「計」の値は、5項目でマイナスの値が最も高い（-75.0）。

一方、「計」の標準偏差は9.0で、5項目で唯一10を切る。7地域とも平均値-75.0との差が小さく、地域差は認められない。

**項目3；雨夜の出迎え**は、他項目でも見られる言い方が存するか否かで7地域が二分される。

またこれは各地域の「計」の値が平均値64.2以上・以下と対応する。

即ち、7地域は〔福岡市・筑紫域・北九州市・筑後南部 対 糟屋域・筑豊西部・筑後北部〕と二分され、左方の4地域で項目の独立性が高い。いずれも本項目だけに見られる言い方1・2語のみである。ただ、右方の3地域にしてもマイナスの値になる地域は存しない。

**項目4；落ち着きのない子供**は、本項目だけに見られる言い方のみ存するか、他項目でも見られる言い方のみ存するか、両方存するかで7地域が三分される。

即ち、〔筑紫域・北九州市 対 糟屋域・筑豊西部・筑後北部 対 福岡市・筑後南部〕となり、左方の2地域（筑紫域・北九州市）は、+30以上で、独立



性が最も高く、右方の 2 地域（福岡市・筑後南部）は、 $-30$  以上で、独立性がない。中間の 3 地域は、ほぼ  $0 \pm 10$  の範囲に収まる。

**項目 5；疲労感**は、**項目 3**と同じく他項目でも見られる言い方が存するか否かで 7 地域が二分される。

ただ、本項目だけに見られる言い方が多く、いずれも回答率が高い。このため、全体の「計」の平均値は  $135.3$  で 5 項目で最も高い。

即ち、7 地域は「福岡市・筑紫域・北九州市・筑後北部・筑後南部 対 糟屋域・筑豊西部」の如く二分され、左方の 5 地域がより独立性が高く、「計」の値は  $140$  以上である。

一方、右方の 2 地域も他項目でも見られる言い方が存するとは言え、本項目だけに見られる言い方が優勢で、「計」の値がマイナスになることはない。この点で本項目は全体として独立性が高い。

〔32〕地域差の見られない**項目 2**を除いて、4 項目を通すと、独立性の違いに基づく地域の組み合わせが一定する。

中でも糟屋域と筑豊西部が全体的に独立性が低く、同じ分類になることが多い（**項目 3・4・5**）。更にこれらに筑後北部が附属する（**項目 3・4**でまとまる一方、**項目 5**は別）。

その他 4 地域では、北九州市と筑紫域、福岡市と筑後南部に二分される。しかし、これらの内、北九州市・筑紫域の方が一体性が高く、左方に位置（**項目 3・4・5**）、即ち、他項目と共通する言い方が少なく、独立性が高い。

一方、**項目 1**で筑後南部が唯一「計」がプラスになって特立される。このため、**項目 3・4・5**で福岡市と同じまとまりになるものの、北九州市・筑紫域に比べて一体性が若干落ちる。

以上、**表一**から読み取れる福岡県内 7 地域のまとまり、即ち、地域差は〔2〕項で述べた区分のあり方の 3 分類とほぼ一致する。

例えば、糟屋域・筑豊西部・筑後北部は同じⅡ類である。しかし、糟屋域・

筑豊西部は**項目 5**で他の項目でも見られる言い方が存するため、「計」の値が低く、平均値を大きく上回る筑後北部と傾向を異にする。これは、区分のあり方において前2地域が**〔項目 1・2・4 対 項目 3・5〕**、筑後北部が**〔項目 1・2・3・4 対 項目 5〕**の如く、同じ2区分・Ⅱ類でありながら、**項目 3**の所属の違いによって項目の組み合わせが異なることと表裏の関係にある。

また北九州市・筑紫域の独立性の高さは、**〔項目 1・2 対 項目 3 対 項目 4 対 項目 5〕**という7地域で最大の4区分・Ⅳ類であることが数値の上でも確認できることを示す。

ただ、**項目 1**に値の違いが見られた福岡市と筑後南部は、同じⅢ類、同じ**〔項目 1・2・4 対 項目 3 対 項目 5〕**という区分のあり方である。結局、次項の問題になるが、これは**項目 1**だけに見られる言い方の違いで、特に筑後南部における〈シカラシイ〉41.9%の存在が大きい。

〔4〕本項目では、福岡県において5項目の区分のあり方に関わる言い方がどのように使われるかなど、複数の項目で共通する5語（〈ヨダキイ〉〈ヤゼイ〉を除く）を中心に述べる。

〔2〕〔3〕項では、福岡県内7地域における、5項目の区分のあり方を示した。しかし、特に複数の項目に共通する言い方は、どのような回答率を有する、どのような語であるか、個別に言及する程度で全体的に述べることはなかった。

そこで、Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類ごとに、項目の重なりを踏まえ、福岡県の7地域における区分のあり方とそれに関わる言い方について詳述する（論末・図―11～17 参照）

〔41〕Ⅱ類の3地域は、**項目 3**の所属によって糟屋域・筑豊西部と筑後北部に分かれる。

前者2地域は、**項目 1・2・4**が〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉によって、直接・間接の違いはあるが、まとめ、**項目 3**は**項目 5**と〈ダルイ〉によってまとまる。また**項目 4**が〈ウザイ〉または〈ウットーシイ〉で重なる一方で、それだ

けの言い方として〈ウルサイ〉または〈シャーシイ〉が見られる。項目 4 に独自の言い方が存するのは、福岡県では他に同じⅡ類の筑後北部だけである。

筑後北部は、同じく 5 項目が二分される。即ち、項目 3 が項目 1・2・4 とまとまるため、項目 5 が特立される。項目 3 が項目 1・2 とある言い方で共通すること、またそれが〈シャーシイ〉であることは、本稿で対象とする九州 18 地域では例外的で、筑後北部の特徴となる。

項目 1・2 と項目 3 が重なることは、福岡県で他に例がないが、佐賀市・佐賀東部・長崎市では見られる。しかし、〈シャーシイ〉が項目 1・2・3 に共通することは、筑後北部だけである。〈シャーシイ〉は、福岡県ではむしろ項目 4 に一般的で、県内 7 地域で 30% 以上の回答率である。このため、山県（2012）では本県の準共通語的形式とした。

この点で 5 項目を二分するⅡ類ながら、筑後北部は、〈シャーシイ〉による項目 1・2 と項目 3 の重なりを特徴とする点で、Ⅱ類の中だけでなく、福岡県の中でも特異な位置にある。

[32] 項では糟屋域・筑豊西部に筑後北部が附属すると述べた。しかし、以上によると、同じⅡ類ながら、また地理的な距離が示す如く、ことばの上では別系統の地域どうしであると言える。

[42] Ⅲ類の福岡市と筑後南部は、区分のあり方では一致し、項目 1 において他項目と共通する言い方と独自の言い方の多少が異なる程度であった。

区分は同じ [項目 1・2・4 対 項目 3 対 項目 5] となり、項目 1・2・4 がある言い方で共通する。福岡市は〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉、筑後南部は〈セカラシイ〉で、言い方が異なる。ただ、筑後南部でも〈ウザイ〉は項目 1・2 で共通する。このため、項目 1・2・4 に関する両地域の違いは〈セカラシイ〉の有無だけである。

一方、福岡市で〈セカラシイ〉は全般的に回答率は低い（項目 1=2.9%、項目 2=4.3%、項目 4=20.0%）。その他、筑後南部には項目 1 に対象 8 地域で

唯一 30% 以上となる〈シカラシイ〉が見られる。

このように同じ項目の組み合わせながら、福岡市と筑後南部は、各項目を代表する言い方に違いが多い。このとき、異なる言い方を比較すると、福岡市の方が筑後南部より新方言が多い。

[43] **Ⅳ類**の北九州市と筑紫域は、**項目 1**と**項目 2**が〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉で共通するなど、5 項目の区分のあり方を初めとして各項目で 30% 以上になる言い方がほぼ一致する。

唯一の違いは、**項目 3**で北九州市が〈メンドイ〉に加えて〈メンドークサイ〉も 30% 以上となることである（33.3%、但し、筑紫域は 28.4% で、約 5% の差に過ぎない）。地理的に隣接しない北九州市と筑紫域でこれだけ一致することは、注目に値する。

[44] 5 項目を 4 区分する北九州市・筑紫域のあり方は、福岡県内の多くの地域の要、即ち、変化相において古態を示す。

特に北九州市のあり方を基点に考えると、**Ⅲ類**の福岡市のあり方には、**項目 4**での〈シャーシイ〉の減少と〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉の増加で至る。また**Ⅱ類**の筑豊西部のあり方には、福岡市と同じく**項目 4**での〈シャーシイ〉の減少と〈ウザイ〉〈ウルサイ〉の増加に加え、**項目 5**での〈ダルイ〉の増加で至る。ただ、**Ⅱ類**の糟屋域のあり方には、**項目 3**での〈メンドークサイ〉の減少が必要で、筑紫域からの変化が都合がよく、**項目 3**での〈ダルイ〉の増加、**項目 4**での〈ウットーシイ〉の増加で至る。

いずれも全国共通語・新方言の増加、伝統的方言の減少で共通し、変化の方向として妥当なものである。

ただ、福岡県内でも筑後北部・筑後南部は、北九州市・筑紫域から変化したあり方であると考えすることはできない。<sup>○注(8)</sup>

例えば、筑後両地域で**項目 4**〈セカラシイ〉が 30% 以上となる点は、他 5 地域に見られない。更に同じ筑後域ながら、両地域の違いも大きい。区分のあ

り方では、**項目3**の所属が異なる。これは〈シャーシイ〉のためで、筑後北部34.4%、筑後南部0%で、差が大きい。また**項目4**〈シャーシイ〉は福岡県内の**準共通語形式**で、県内で一定の広がりを持つが、筑後南部は1名・2.3%に過ぎない。

〔5〕山県（2012）では、代表的な言い方の使われ方から項目ごとに地域差のあり様を示すとともに、九州7県及び山口県・広島県の**共通語的形式・地域固有形式**や福岡県内の**共通語的形式・地域固有形式**などの11地域ごとの使われ方や有意差の現れ方を数量化して地域の特徴を捉えた。

方法的な問題も存するが、それらに依ると、筑後北部・筑後南部は、**項目5**を除くと、伝統的方言の多さを特徴とし、**共通語的形式・地域固有形式**などの使われ方から導かれる福岡県の平均的なあり様に比すと、両地域とも偏差は大きかった。このため、両地域は、**項目1・2・4**を中心に地域の固有性・独自性が際立つとまとめた。

ただ、北部と南部の違いは、項目によって、対象とするデータによって異なる。全般に筑後北部は**地域固有形式**の多さ（回答率の高さ）、筑後南部は**共通語的形式**の少なさ（回答率の低さ）が特徴的であった。

このように前稿では回答率の低さも対象にした。従って、本稿の如く、30%以上の回答率を有する言い方だけを問題にする場合、**表一1**の値に若干関係する程度で、筑後南部を特徴付ける言い方は項目の区分のあり方に関与しない。このため、〔4〕項の如く同じ筑後域でも北部をより特異な位置にあると判断することになった。

このように本稿の如き項目の区分のあり方やそれに関わる言い方に基づく観点も一つの実態の切り取り方である。しかし、このように観点が異なっても、程度の差こそあれ、福岡県内で筑後域が特異な位置にあると認められることは注目に値する。

一方、山県（2012）では、福岡市・北九州市がともに県内諸地域の中で最も

固有性・独自性を有さない、平均的なあり様を示すとまとめた。ただ、これは**共通語的形式・地域固有形式**などの使われ方を基準としたもので、最終的には**項目4〈シャーシイ〉**の有無に基づき、それを有さない福岡市の方が北九州市より全国共通語寄りであるとした。

このことに関して、本稿では、北九州市・筑紫域のまとまりが変化の流れから最も古態を示すと判断した。一方、福岡市は一段階変化の進んだあり方である。これは、福岡市の方が統合の進んだ3区分であることに加え、違いの見られる代表的な言い方でより新しい語が存するためである。このように前稿と異なる観点で考察しながら、本稿でも福岡市と北九州市の関係につき、同一の結論が得られた訳である。

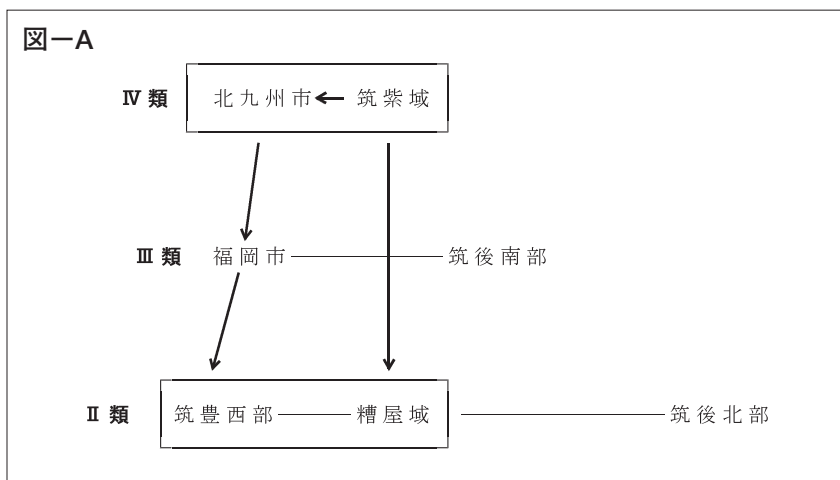
そこで、基本的には、**Ⅱ類～Ⅳ類**の3分類を基盤にしながら、区分のあり方や関わる言い方を考慮すると、福岡県内の7地域の関連は、次頁の**図一A**の如くまとめられる。同じ類は横に並べ、地域間の遠近関係に応じて間合いを取った。従って、**Ⅱ類**の筑豊西部と糟屋域のまとまりは、この2地域全体が筑後北部と等しい距離にあることを示す。糟屋域の方が筑豊西部より筑後北部に近い訳ではない。

また矢印による先後関係は、地域ごとの区分のあり方をある一貫した変化の方向性で結び付けたもので、北九州市・筑紫域のあり方を起点にして5地域が同一の系統にあることを示す。<sup>○注(9)</sup>

以上の如く、**図一A**は、実際に観察される区分のあり方を一定の方向性で結び付けたものである。従って、この観点を考慮すると、〔北九州市・筑紫域〕〔福岡市〕〔筑豊西部・糟屋域〕のまとまりと〔筑後南部〕〔筑後北部〕のまとまりに二分される。

〔6〕**項目4**を欠く4項目の区分のあり方を検討した山県（2011・12）において福岡県は〔**項目1・2** 対 **項目3** 対 **項目5**〕という区分のあり方を示した。

当該諸県における使用状況による条件にかかわらず、福岡県には元々**項目4**



・矢印は、ある一貫した変化を想定して移行する方向にあり、同系統のあり方であることを示す。

に 30% 以上の言い方は存在しない。20% 台に〈ウザイ〉25.8%・〈ウットーシイ〉27.8%・〈ウルサイ〉25.6%・〈シャーシイ〉28.9% の如く 2 系統の言い方が拮抗する。即ち、〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉は項目 1・2 に共通する言い方である一方、〈ウルサイ〉〈シャーシイ〉は、どの項目にも見られない、項目 4 に固有の言い方である。

本章で検討した福岡県内各地域で言えば、福岡県全体の区分のあり方は、福岡市と北九州市・筑紫域の中間的な様相である。即ち、前者・II 類と後者・III 類の分かれ目となる項目 4 の言い方は、福岡市は〈ウザイ〉31.7%・〈ウットーシイ〉30.2%、北九州市・筑紫域は〈シャーシイ〉30.3%・41.8% で、県全体で拮抗する 2 系統の言い方にはほぼ対応する（〈ウルサイ〉は 3 地域とも 30% 未満）<sup>○注(10)</sup>

これまで県庁所在地の回答者の多さのため、その都市の傾向が県全体のあり方に反映しやすい、注意が必要であると繰り返し述べた。しかし、福岡県では当てはまらず、県全体と県庁所在地が即応しない。数の上で県庁所在地（139

名)に匹敵する2地域(66名+67名)において異なるあり方が存するため、両者の平均的・中間的なあり方が県全体に反映している。

山県(2012)のまとめの一つとして「福岡市・北九州市が…最も平均的な有り様を示すことは、若年層の言語相において、両市を同心円の中心とする、福岡県の新たな地域差が存在する可能性を伺わせる」(山県(2012)・4章[2]項)と述べた。本稿では、北九州市は、県内諸地域の系統を考えると要になる地域の一つであることの他に、福岡県全体を考えると、福岡市と並んで県全体のあり方に関与する地域として重要であることを示した。そこで、福岡県以外の6県の県庁所在地との地域差を問題とする際には、福岡県では福岡市以外に北九州市を含め、都合8都市で検討する。

## 32. 九州6県諸地域の実態

[1] 福岡県以外の九州6県において対象とする地域は11地域で、内訳は、宮崎県のみ宮崎市だけ、他5県は県庁所在地の5都市とそれに隣接する地域である。

ただ、11地域の実態すべてを等しく示し、福岡県内の7地域を含めた全18地域に見られる地域差を示すことは、紙面の関係から難しい。そこで、福岡県外は回答者の多い県庁所在地6都市を中心とし、最終的には福岡市・北九州市と合わせた都合8都市に見られる地域差を示す。これは、宮崎市26名・佐賀市30名を除くと、ほぼ18地域の平均50.3名かそれ以上の規模の都市どうしを比較することになる。

このとき、県庁所在地の実態について、多角的に捉えることを目的に山県(2011・12)で示した県全体の区分のあり方は何を反映していたのか、山県(2014)で示した項目ごとに見られる県庁所在地の特徴・性格とどのような関連があるのかなど、これまでの論考の記述と比較する。また同じ趣旨で、宮崎県を除く5県における県庁所在地と隣接地域との違いなども検討して、各県内



での県庁所在地の位置付けを行う。

なお、その都度指示しないが、論末の資料や図-2~7 は適宜参照されたい。

[2] 福岡県と同じく、山県（2011・12）の原則によって対象 11 地域ごとに 5 項目を区分すると、そのあり方は次の如くである。

なお、鹿児島市と薩摩南部は、項目 4 に 30% 以上の言い方が存しない。そこで、20% 台で最も回答率の高い言い方に基づいて、仮にⅢ類・Ⅱ類とした。

## Ⅱ類

佐賀市；項目 1・2・3・4 対 項目 5

大分市；項目 1・4 対 項目 2・3・5

宮崎市；項目 1・2・3・5 対 項目 4

\*薩摩南部；項目 1・2・(4) 対 項目 3・5

## Ⅲ類

佐賀東部；項目 1・2・3 対 項目 4 対 項目 5

長崎市；項目 1・2・3 対 項目 4 対 項目 5

熊本市；項目 1・2 対 項目 3・5 対 項目 4

大分中部；項目 1 対 項目 2・3・5 対 項目 4

\*鹿児島市；項目 1・2 対 項目 3・5 対 項目(4)

## Ⅳ類

長崎中部；項目 1・4 対 項目 2 対 項目 3 対 項目 5

熊本北部；項目 1・2 対 項目 3 対 項目 4 対 項目 5

11 地域のうち、項目の組み合わせが同一になるのは、Ⅲ類の佐賀東部と長崎市、熊本市と参考の鹿児島市の 2 組である。同じ類でも項目の組み合わせは多彩で、福岡県内 7 地域の比でない。

以下、県ごとに県庁所在地の区分のあり方について、県内のもう一つの地域、山県（2011・12）で示した県全体のあり方、山県（2014）で示した各都市の特徴・性格などと比べながら、各県内での位置など、その特徴を述べる。これに

よって九州7県の8都市に見られる地域差を検討する準備とする。

[21] 佐賀県は、項目ごとの検討によると、西部と北部が特徴を有し、項目を通すと、「全体としては《西部 対 佐賀市・東部 対 北部》という地域差が妥当」（山県（2014）・31章〔7〕項）とまとめた。

区分のあり方でも佐賀市と隣接する佐賀東部の違いは僅かである。

分類は、佐賀市はⅡ類、東部はⅢ類と異なりはする。しかし、違いは項目4の所属だけである。即ち、東部で項目4〈セカラシイ〉の8名・29.6%の回答率が30%以上となれば、佐賀市と同様に項目1・2・3・4が〈セカラシイ〉で共通する。このように佐賀市と佐賀東部の違いは僅かである。

佐賀市の如く項目1・2・3・4がまとまる区分は、他に福岡県の筑後北部に見られるだけである。しかし、筑後北部はある言い方で4項目が共通する訳でない。<sup>注(11)</sup> この点でも佐賀市は当該諸地域の中で特異な位置にある。

[211] 山県（2014）において佐賀市は地域の特徴が明確で、一貫性があるとして立項して取り上げた。

これは、〈セカラシイ〉の回答率が常に高く、4項目に及ぶ一方、幾つかの項目に共通して全国共通語の回答率も高い。そこで、「本市が、当地の伝統的方言を保ちつつ、共通語も積極的に受け入れる二面性を持つ」（山県（2014）・4章〔31〕項）とまとめた。

これは、東部と比較すると、佐賀市で項目2〈ウットーシイ〉・項目3〈メンドークサイ〉・項目5〈ツカレタ〉が回答率30%以上であるため、際立つ。しかし、項目の区分のあり方に関係するのは、〈セカラシイ〉だけである。

[212] 県単位で4区分のあり方を検討した山県（2011・12）において佐賀県は「項目1・2・3 対 項目5」という区分であった。

項目4は、対象とする9県を通じた条件を満たす言い方が存しないため、全体として対象外にした。しかし、佐賀県では〈セカラシイ〉が32.7%で対象となる。このため、佐賀県は項目1・2・3・4が〈セカラシイ〉で共通する。

これは、佐賀市と同一の区分であり、区分に関わる言い方も同一である（その他、**項目1・2**が〈ウザイ〉で共通することも同一）。

本県を特徴付ける〈セカラシイ〉は、前項の如く佐賀市で特に回答率が高い。一方、西部・北部は、東部と同じく佐賀市ほど**項目1・2・3・4**を通して回答率が高くなることはない。しかし、東部と併せて、入れ替わるように必ずどの地域かが30%以上となる（山県（2014）・**31章** [72] 項参照）。従って、佐賀県全体の区分のあり方は、佐賀市の傾向が反映しているところも大きい。しかし、山県（2014）で「本県の**共通語的形式**」とした如く〈セカラシイ〉が県内で幅広く使われていることから、県全体のあり方は、佐賀市の傾向が表立っているように見えるものの、全県的な傾向を反映した結果であるという方が妥当である。

[22] 長崎県は、〈ウザイ〉〈ヤゼイ〉の回答状況によって県内差が決定され、「《長崎市・南東部 対 中部・北部》という県を南北に分かつ地域差が著しい」（山県（2014）・**32章** [73] 項）とまとめた。

本稿で対象とする長崎市と中部には、異なる観点による前稿同様、区分のあり方でも別系統と言える差異が存する。

即ち、長崎市は〔**項目1・2・3 対 項目4 対 項目5**〕、中部は〔**項目1・4 対 項目2 対 項目3 対 項目5**〕で、佐賀市と佐賀東部の如き先後関係は考えられない。5項目をすべて別の言い方で区分する祖型として想定し、それから別々の変化を考えなければ、両地域の組み合わせは生じない。<sup>○注(12)</sup>

勿論、同じ県であるためでもあろうが、項目ごとでは30%以上の言い方が共通することがあり、**項目1・5**では3語とも一致する。しかし、項目の重なりで、長崎市は**項目1・2・3**が〈ウザイ〉〈ヤゼイ〉で共通し、中部は**項目1・4**が〈ウットーシイ〉で共通する。

[221] 項目ごとに代表的な言い方で県内差を考えた山県（2014）でも、長崎市は〈ウザイ〉〈ヤゼイ〉の回答率の高さを特徴として取り上げた。

併せて、これらが問題となる項目では特定の項目だけに見られる全国共通語も高い回答率を有する点を特徴とした。区分のあり方に関係しないが、中部と比べた場合、〈メンドークサイ〉が30%以上で、**項目3**だけに見られる言い方の一つとなる。

[222] 長崎県は、[**項目1・2 対 項目3 対 項目5**] という区分のあり方で、**項目1・2**が〈ウザイ〉〈ヤゼイ〉が共通する。

長崎市は、これら2語で**項目1・2**に加え、**項目3**が共通するのに対して、県全体では、**項目3**は〈ウザイ〉22.5%・〈ヤゼイ〉27.8%・〈メンドークサイ〉30.8%・〈メンドイ〉56.8%の如く前2語の回答率が30%に至らない。

更に対象外の**項目4**には30%以上の言い方が存さず、最高値の〈ウルサイ〉27.2%に対し、〈ウザイ〉23.1%・〈ヤゼイ〉17.8%に留まる（参考の鹿児島市・薩摩南部に倣えば、長崎県は[**項目1・2 対 項目3 対 項目(4) 対 項目5**]のⅣ類となる）。

結局、県全体と長崎市の違いは**項目3**だけで、その原因は県全体で〈ヤゼイ〉が基準回答率を僅かに下回るためである。とはいえ、これも、注（12）に示した如く、本県を特徴付ける〈ウザイ〉〈ヤゼイ〉が全県的な事象でなく、地域差が存在するために生じたことである。更に県全体の回答者に長崎市の占める割合が平均的な32.0%に止まることもあろう。従って、県全体のあり方は、長崎市の傾向を反映したものでなく、県内諸地域の平均的なものを反映していると言える。

[23] 熊本県は、県単位の検討によると、福岡県とともに(準)地域固有形式が存しないことが特徴であった。

しかし、県ごとに地域差を検討すると、**項目4**〈セカラシイ〉が本県の**共通語的形式**と言える使われ方であった。このため、本稿で対象とする熊本市・熊本北部は、**項目4**が特立される。更に両地域は、**項目1**と**項目2**がともに〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉で共通するものの、**項目3**と**項目5**の区分で違いが見

られる。熊本市は、〈ダлуй〉が両項目に共通して、Ⅲ類となるのに対し、熊本北部は項目 3 〈ダлуй〉が 7 名・20.6% に留まり、両項目が重ならず、Ⅳ類となる。

[231] 項目ごとの検討において、熊本市は、大分市・鹿児島市と並んで項目に共通する特徴が見出しがたかった。

確かに「項目 3 〈ダлуй〉に見られる新方言への志向」（山県（2014）・4 章 [34] 項）の如く本市の性格は認められる。項目 3 〈ダлуй〉は、有意差の見られる回答率の高さ（48.9%）のため、項目 5 と共通することになる。しかし、同様な重なりは、中部でも見られ、熊本市だけの事象でない。また南部 21 名も項目 3 〈ダлуй〉は 6 名・28.6% で、北部 20.6% ほど低くない。

[232] 熊本県全体は「項目 1・2 対 項目 3・5」という区分のあり方ながら、項目 4 に 30% 以上の当項目だけに見られる言い方が存するため（〈ウルサイ〉 32.6%・〈セカラシイ〉 38.5%）、熊本市と同一の 3 区分である。

言い方は、熊本市で項目 5 〈シンDOI〉が見られるだけで、他 4 項目では完全に一致する。

項目 3 〈ダлуй〉は、前項の如く北部だけで回答率の低い、ほぼ全県的な事象である。更に熊本市の回答率 48.9% が有意差の見られる程高い上、中部でも 50.0% と高いため、県全体で 35.6% となり、項目 5 の全国共通語 〈ダлуй〉と重なる。この点で熊本県全体の 3 区分は、全体の回答者の 34.8% を占める熊本市の傾向が反映したところも少なくないが、全県的な傾向が反映していると考えべきである。

[24] 大分県で対象とする大分市・大分中部は、それぞれⅡ類・Ⅲ類で、分類が異なるものの、項目 1 と項目 4 が重なるか否かの違いで、項目 2・3・5 がまとまる点は一致する。

この 3 項目が〈ヨダキイ〉で共通することは、福岡県の 7 地域を含め、他に例がない。これは大分県の 3 地域（大分市・中部以外に南部）の特徴であり、

大分県の〈ヨダキイ〉の用法上の特徴でもある。

なお、大分市と中部の違いは、中部において**項目 4**〈ウットーシイ〉が12名・29.3%で、**項目 1**と重ならないためである。この値からも大分市と中部の違いはないに等しい。

実際、項目ごとの検討に基づく山県（2014）でも**項目 1**を除き大分市と中部は同じ分類とした。

[241] 項目ごとの検討で、大分市には、〈ヨダキイ〉を別にすると、「**項目 1・4**〈ウットーシイ〉、**項目 3**〈メンドークサイ〉、**項目 5**〈ダルイ〉〈ツカレタ〉など、全国共通語形の方が高く、一次形式をなす」（山県（2014）・4章 [34] 項）という性格が見られるとした。

このことは、項目の区分のあり方に**項目 1・4**が〈ウットーシイ〉で共通することで関与する。その他4地域も、これらの言い方の回答率が高いが、大分市と同じく〈ウットーシイ〉が両項目に共通するのは、南部だけである。

[242] 大分県全体の区分は、二つの項目で共通する言い方3語によって4項目が連鎖して、一つにまとまるⅠ類である。

即ち、**項目 1**と**項目 2**が〈ウットーシイ〉、**項目 2**と**項目 3**が〈ヨダキイ〉、**項目 3**と**項目 5**が〈ダルイ〉で共通し、4項目が一つにまとまる。更に本県では**項目 4**で〈ウットーシイ〉〈シャーシイ〉が30%以上となるため、**項目 1・2・3**が〈ウットーシイ〉でまとまる。このように**項目 4**が加わっても5項目は区分されず、Ⅰ類である。

大分市のあり方・Ⅱ類と比較すると、**項目 2**〈ウットーシイ〉の回答率の違いが区分のあり方に関係する。但し、大分県全体では32.5%、大分市では18名・29.5%で、両者の差は僅かである。

なお、南部20名は**項目 1・2・4**が〈ウットーシイ〉、**項目 2・3・5**が〈ヨダキイ〉で共通し、県全体と同一のⅠ類となる。中部もⅢ類であるが、結果的に区分に関わる**項目 2・4**〈ウットーシイ〉は、ともに12名・29.3%で、Ⅰ類と

の差は小さい。

大分県は、県内差が比較的大きく、西部・北部は〈ヨダキイ〉の回答率の低さなど、大分市・中部・南部との違いが目立つ。しかし、一方で両地域は県全体と大分市で差の見られた**項目 1**〈ウットーシイ〉の回答率が他 3 地域に比して高い（西部 33.3%、北部 41.7%）。従って、大分県全体の区分のあり方は、違いが小さく、回答者の約 8 割が集中する大分市・中部・南部の傾向を強く反映しつつも、その他の 2 地域の傾向も無視できないと言える。

[25] 宮崎県は、県全体の回答者が九州 7 県で最も少ない 70 名に留まることもあり、対象地域は、県庁所在地の宮崎市 26 名だけである。

宮崎市は、Ⅱ類として**項目 1・2・3・5**と**項目 4**に分かれる。

同じくⅡ類の佐賀市は**項目 5**が特立され、他 4 項目と区別された。ただ、佐賀市は〈セカラシイ〉によって 4 項目がまとめられたのに対し、宮崎市は 4 項目は直接に結び付かない。即ち、**項目 1**と**項目 2**が〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉、**項目 2**と**項目 3**が〈ヨダキイ〉、**項目 3**と**項目 5**が〈ダルイ〉で共通し、結果的に**項目 1・2・3・5**がまとまる。**項目 4**は、〈ウルサイ〉〈セワシイ〉で特立される。

なお、大分県・宮崎県は、**項目 2・3**で〈ヨダキイ〉が(準)共通語的形式であった。しかし、大分市と宮崎市は、区分のあり方から異なる。〈ヨダキイ〉の関わる項目は、大分市で**項目 2・3・5**である。しかし、宮崎市は**項目 5**が 19.2%に過ぎないため、上記の如く**項目 2・3**だけである。両市の間に存する〈ヨダキイ〉の用法の違いは、〈セカラシイ〉などとともにも別稿で論じる。

[251] 項目ごとの検討で、宮崎市は、佐賀市・長崎市と並んで特徴が顕著であった。

即ち、どの項目でも、全国共通語・伝統的方言・新方言を問わず、県内で使われる言い方なら、その回答率が県内 4 地域で最も高くなることが多い。ただ、これは回答行動の問題（例えば、使うと思う言い方なら、程度差・場面差を考

えずに選択してしまう回答者の存在) であるかもしれない。他の地域に対して、この傾向は次項の如く**項目 1**と**項目 2**で共通する言い方〈ウットーシイ〉で顕著に現れる。

[252] 宮崎県全体でも大分県と同じく 4 項目が連鎖して一つにまとまる。

即ち、**項目 1**と**項目 2**が〈ウザイ〉、**項目 2**と**項目 3**が〈ヨダキイ〉、**項目 3**と**項目 5**が〈ダルイ〉で共通する。

宮崎市と比較すると、違いは最初の 2 項目における〈ウットーシイ〉の有無で、他は同一である。県単位では**項目 4**に 30% 以上の言い方が存しないが、〈ウルサイ〉19 名・27.1%は無視できない。これを考慮すると、更に宮崎市との違いはなくなる。

なお、回答者はすべて 15 名以下となる他の県内 3 地域では、宮崎市と同じく**項目 1**と**項目 2**、**項目 2**と**項目 3**、**項目 3**と**項目 5**がほぼ同じ言い方で共通して**項目 1・2・3・5**がまとまる。違いは、最初の 2 項目で共通する言い方が宮崎市だけが〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉で、他 3 地域は、県全体と同じく〈ウザイ〉だけで、**項目 2**〈ウットーシイ〉は 3 地域とも 20% 以下である。

この点で宮崎県全体のあり方は、県庁所在地の傾向でなく、県全域の平均化された傾向を反映したものであると言える。

[26] 鹿児島県で対象とする 2 地域は、ともに**項目 4**で 30% 以上となる言い方が存しない。このため、20% 台の言い方に基づいた区分を参考として扱う。

鹿児島市は、**項目 1**と**項目 2**が〈ウザイ〉、**項目 3**と**項目 5**が〈ダルイ〉で共通する。**項目 4**は、〈ウルサイ〉24 名・29.3%や〈ウザイ〉22 名・26.8%が候補となる。[2] 項では最も回答率の高い〈ウルサイ〉を取って、[**項目 1・2 対 項目 3・5 対 項目(4)**]のⅢ類とした。

薩摩南部は、[**項目 1・2・(4) 対 項目 3・5**]のⅡ類とした。**項目 4**は、〈ウットーシイ〉8 名・28.6%や〈ウルサイ〉7 名・25.0%で、**項目 1・2**で共通する〈ウットーシイ〉を取って、3 項目をまとめた。



もし**項目 4**の 20% 台の言い方すべてを採用すれば、鹿児島市は、〈ウザイ〉によって**項目 1・2**がまとまり、鹿児島市も薩摩南部と同じⅡ類で、項目の組み合わせも同一になる。このように両地域の違いは小さい。

[261] 項目ごとの検討で、鹿児島市は、宮崎市と反対の傾向で、県内諸地域の中で全体的にどの言い方でも回答率が低いことを性格とした。

ただ、当市だけを見ると、「**項目 5**を除き、〈ウザイ〉〈ダルイ〉〈メンドイ〉など、新方言形が高い」（山県（2014）・4 章 [34] 項）とまとめられる。

これは、**項目 1・2**で共通するのは、薩摩南部は〈ウットーシイ〉であるのに対し、鹿児島市は〈ウザイ〉であることにその一端が伺える。

[262] 鹿児島県は、**項目 4**を除いた場合、鹿児島市・薩摩南部と同一の〔**項目 1・2** 対 **項目 3・5**〕という区分のあり方で、前者は〈ウザイ〉、後者は〈ダルイ〉で共通する。

**項目 4**は〈ウルサイ〉が 33.2% であるため、特立し、仮に考えた鹿児島市のⅢ類と同一となる。その他、**項目 1・2**が〈ウザイ〉で共通するのは、薩摩南部でなく、鹿児島市である。

鹿児島市以外の 3 地域は、**項目 3・5**は〈ダルイ〉で共通し、**項目 4**はどの項目とも共通しない。しかし、**項目 1**と**項目 2**は、大隅南部で〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉で共通するだけで、薩摩北部は区別され、大隅北部は**項目 2**に 30% 以上の言い方が存しない。

このように**項目 1・2**の区分、それに関わる言い方の点で、県内差が目立つ。ただ、県内諸地域の中では鹿児島県全体と鹿児島市が最も類似する。従って、本稿の限りでは、鹿児島県全体のあり方は、全県的な傾向の反映でなく、最高の回答者の比率 37.8% を占める鹿児島市の傾向がやや強く反映していると言える。

[27] 九州 6 県の県庁所在地における 5 項目の区分のあり方につき、宮崎県を除いて隣接する地域、県全体のあり方などと比較しながら、種々検討した。

県内差は、長崎県の長崎市と中部を除くと、佐賀県・熊本県・大分県・鹿児島県に顕著な違いは認められない。隣接する地域どうしの比較であったことにもよろう。しかし、これは県庁所在地の都市のあり方はある程度地理的な広がりを持つ、即ち、他地域でも見られるあり方を示すという点で、地域のことばの実態として一般性を有することを物語るとも言える。従って、極端な物言いとして、違いの見られた長崎市のあり方は、本調査で対象とした、本市出身の回答者がたまたま特異な回答行動を取った結果であるということもできる。

県全体のあり方との比較では、違いがあっても区分に関わる言い方が基準回答率の30%を挟む $\pm 5\%$ 程度の差に基づくことが多かった。これは、県全体の回答者に占める県庁所在地の回答者が30%以上と高いことも一因である。更に、多くの場合は、上記の如く隣接地域との違いが小さいことが物語る如く、区分のあり方に関して県庁所在地を中心とした一定の地域、または全県で同じ傾向を示しているためである。

従って、本稿の検討の限りでは、県全体の区分のあり方が反映していたものは、次の如くまとめられる。

- ①佐賀県・長崎県・熊本県・宮崎県＝県内諸地域の平均的な傾向を反映する。
- ②大分県＝大分市・中部・南部など、県中央部の平均的な傾向を強く反映する。
- ③鹿児島県＝鹿児島市の傾向がやや強く反映する。

福岡県も大分県と同傾向で、福岡市や北九州市・筑紫域など、回答者の多い県内一部地域の傾向を反映する。しかし、大分県の西部・北部の項目1〈ウットーシイ〉と異なり。これら以外の地域の傾向が表立たなかつただけであるとも言える。即ち、本稿は、県内諸地域の実態を等しく検討して、県内差を記述することを目的にするものではなかつた。従って、③の鹿児島県も含め、上記①～③の3分類は、各県内のあり方を通覧した暫定的なものである。

なお、県全体と県庁所在地の一致度につき、大まかに二分すると、佐賀市・熊本市・宮崎市・鹿児島市は一致度が高く、福岡市・長崎市・大分市はやや一致度が低い。

〔3〕地域差を検討する前段階として、15 頁の表一1 によって項目ごとに各県庁所在地の 6 都市の特徴について、全 18 地域の値（B 欄）を参照しながら数量的に捉える。

この場合、31 章〔3〕項でも述べたが、「計」の値によって福岡市・北九州市を含めた 8 主要都市がどのようなまとまりを示すか略述する。その上で 5 項目を通して対象 8 都市がどのようにまとまるか、また〔2〕項のⅡ類～Ⅳ類の 3 分類とどのような対応をするかなどを検討する。

〔31〕項目 1；前髪掛かりは、一部地域を除き、項目 2；長雨続きと重なりつつも、本項目だけに見られる言い方を 1・2 語有する。

全体的に項目 2 に次いで独立性が低く、18 地域全体では「計」の値がマイナスになる（-22.2）。しかし、何地域かはプラスになる。

8 地域は、値の違いによって概ね〔福岡市・北九州市・熊本市・宮崎市 対 佐賀市・長崎市 対 大分市・鹿児島市〕の如く三分される。左方の 4 地域（福岡市・北九州市・熊本市・宮崎市）は、他項目でも見られる言い方の回答率が高く、類似したマイナスの値である。一方、右方の 2 地域（大分市・鹿児島市）は、本項目だけに見られる言い方の回答率が高く、値は  $0 \pm 10$  の範囲で、8 地域の中では独立性が高い。勿論、8 地域以外では、極端な値を取る地域があり、標準偏差は項目 5 に並ぶ高さである（62.0）。

項目 2；長雨続きは、5 項目の中で最も独立性が低く（18 地域の「計」は -57.7）、長崎中部を除く 17 地域で他項目でも見られる言い方が必ず存する。更に佐賀県・長崎県の 4 地域以外は、他項目でも見られる言い方しか存しない。

8 地域すべて「計」の値はマイナスである。全体の標準偏差が 5 項目で最も低いことが物語る如く（28.9）、8 地域の値の差は小さい。マイナスの値は、宮

崎市が最も高く、鹿児島市が最も低い。佐賀市・長崎市は、本項目だけに見られる言い方も有するが、1語で回答率が高くないため、「計」の値は平均値に近い。

**項目3；雨夜の出迎え**は、本項目だけに見られる言い方が優勢で、全体として独立性が高い。

その中で唯一マイナスとなる大分市・宮崎市は注目に値する。本項目だけに見られる面倒系の言い方より他項目でも見られる〈ヨダキイ〉〈ダルイ〉の方で回答率が高いためである。逆に、他項目でも見られる言い方を有さず、本項目が特立される福岡市・北九州市は、群を抜いてプラスの値が高い。

**項目4；落ち着きのない子供**は、福岡県の場合、本項目だけに見られる言い方のみの地域、他項目でも見られる言い方のみの地域、両方存する地域に三分された。

他県は、両方存する地域は存さず、他項目でも見られる言い方のみの福岡市・佐賀市・大分市のまとまりと本項目だけに見られる言い方のみの北九州市・長崎市・熊本市・宮崎市のまとまりに二分される。前者は「計」の値がマイナス、後者は「計」の値がプラスで、両グループの差は大きい。更に値の近似性から前者は福岡市と佐賀市・大分市、後者は北九州市・長崎市と熊本市・宮崎市にそれぞれ二分される。

**項目5；疲労感**は、5項目の中で最も独立性が高く、18地域の「計」の値は112.3と、これに次ぐ**項目3**の値40.2の約2.5倍である。

他項目と重なることがない訳ではないが、本項目だけに見られる言い方の種類が多く、いずれも回答率の高い。

8地域は他項目でも見られる言い方を有するか否かで、二分され、有さない福岡市・北九州市・佐賀市・長崎市のまとまりと有する熊本市・大分市・宮崎市・鹿児島市のまとまりに分かれる。しかし、両者の「計」の値の差は小さく、前者の北九州市と後者の宮崎市が同じ値（157.6）を取る。しかし、この値を

境にして**項目5**が特立するか否かに分かれる。

特立する前4都市の差は小さいが、特立しない後4都市は、値が100を超える熊本市・宮崎市と値が $0 \pm 10$ に止まる大分市・鹿児島市に二分される。

[32] 5項目を通して一貫した地域のまとまりは、見出しがたい。

福岡県内の諸地域と異なり、地域差が大きいためである。その中で同じ福岡県であるため、福岡市と北九州市は、1項目を除き、同じまとまりで、ほぼ同じ値になる（**項目1・2・3・5**）。

他6県の県庁所在地では、佐賀市と長崎市が同じまとまりで、同じような値を取ることが多い（**項目1・2・3・5**）。**項目2**で両市を含む両県4地域が本項目だけに見られる言い方を有する点は、「計」の値に反映しないが、分類の点で注目できる。

その他、熊本市・大分市・宮崎市・鹿児島市は、項目ごとに組み合わせを変えてまとまる。値の点では、熊本市と宮崎市（**項目1・4・5**）、大分市と鹿児島市（**項目1・5**）が近似することが多い。しかし、**項目3**の値は、熊本市と鹿児島市、大分市と宮崎市が近似する。

[4] 山県（2011・12）は、県単位で、項目・言い方を絞り込んで検討し、九州7県及び山口県・広島県は〔福岡県・長崎県〕〔佐賀県〕〔熊本県・鹿児島県・山口県〕〔大分県・宮崎県〕〔広島県〕という5グループに分かれるとまとめた。

本稿では、山口県・広島県を除く九州7県の県庁所在地と北九州市を対象にした。5項目の区分のあり方によって、これら8主要都市は、次の如くⅡ類～Ⅳ類の3つに分類される。

論中、県全体のあり方と比較して、全都市で違いが小さいまたは同一であると述べた。改めて、県庁所在地のあり方を並べて比較した場合、県単位で見られた地域的なまとまりとどのように一致するかに注意しながら、また区分のあり方に関わる言い方がどのように使われているかなどを検討して、この3分類

を捉え直す。

## Ⅱ類

佐賀市；項目1・2・3・4 対 項目5

大分市；項目1・4 対 項目2・3・5

宮崎市；項目1・2・3・5 対 項目4

## Ⅲ類

福岡市；項目1・2・4 対 項目3 対 項目5

長崎市；項目1・2・3 対 項目4 対 項目5

熊本市；項目1・2 対 項目3・5 対 項目4

\*鹿児島市；項目1・2 対 項目3・5 対 項目(4)

## Ⅳ類

北九州市；項目1・2 対 項目3 対 項目4 対 項目5

[41] Ⅱ類の3地域は、項目の組み合わせをすべて異にして、基準となるあり方が見出せない。

佐賀市と宮崎市は、特立されるのが1項目である点で共通する。しかし、他4項目のまとまり方が異なる。佐賀市は〈セカラシイ〉が4項目に共通するが、宮崎市は3語で2項目ずつ共通し、その連鎖の結果、4項目がまとまる。

大分市は、大分中部とともに、対象18地域の中で唯一項目1と項目2がまとまらない。一方で、項目2・3・5がまとまるのは、〈ヨダキイ〉を有する宮崎市や大分中部でも見られる特徴である。この点からⅡ類は佐賀市と大分市・宮崎市に二分する。

この二分は、[3]項で論じた如く、佐賀市は、大分市と項目2・4を除き、宮崎市と項目5を除いて、まとまったり、値が類似したりすることがない。その一方で、大分市と宮崎市は、値が近似するのは項目3程度であるが、〈ヨダキイ〉を特徴的に有し、項目3・5が共通するため、近接性は高い。しかし、大分市と宮崎市は大分中部を介在させても、現状のあり方からどちらからどちら

に変化したなど、先後関係は考えられない。項目 2・3 が〈ヨダキイ〉で共通するⅣ類を祖型として想定して、それぞれ独自に変化したと考えなければ、両市は系統的に結び付けられない。

[42] 鹿児島市は、30% 以上の言い方が存さないため、項目 4 を〈ウルサイ〉で特立させる立場によってⅢ類とした。

しかし、〈ウルサイ〉と回答率に差のない項目 4 〈ウザイ〉によって項目 1・2 と共通すると考え、Ⅱ類とすることも可能である。

鹿児島市をⅢ類とすれば、熊本市と同一の区分のあり方となる。特に項目 3 と項目 5 が〈ダルイ〉で共通する点は、熊本市・大分市・宮崎市・鹿児島市という九州の南東部の 4 都市に共通する特徴として重要である。しかし、Ⅱ類として項目 1・2・4 が重なれば、これは、福岡市に限らず、福岡県内の 3 地域に見られる福岡県的な特徴である。

そこで、鹿児島市は、項目 4 の扱いが揺れるものの、項目 3 と項目 5 が共通する点は確かであるため、熊本市と同じまとりとする。この場合、福岡市的な性格が見られるため、福岡市と熊本市の中間で、熊本市寄りに位置付ける。

長崎市は、項目 3 と項目 5 が共通しない点で、熊本市・鹿児島市より福岡市寄りである。しかし、項目 1・2・3 が〈ウザイ〉〈ヤゼイ〉で共通することは、佐賀東部の〈セカラシイ〉に依る重なりと同一である。更に隣接する佐賀市は、同じく〈セカラシイ〉で項目 1・2・3・4 が共通する。長崎市も項目 4 は〈ウルサイ〉が 30% 以上であるが、〈ウザイ〉29.6%・〈ヤゼイ〉27.8% も無視できない。

以上のことから、長崎市は、類を異にするが、福岡市より佐賀県的で、Ⅱ類の佐賀市の方に近い位置、即ち、福岡市と佐賀市の中間で、佐賀市寄りにある。佐賀市と長崎市の近接性は、[32] 項に述べた如く問題ない。それぞれを特徴付ける言い方は〈セカラシイ〉と〈ヤゼイ〉と異なるが、用法的に類似する。

同じⅢ類であるが、区分のあり方や関わる言い方を考えると、福岡市・熊本

市・鹿児島市は近いところに祖型が想定できそうである。しかし、長崎市は、**項目 3**が**項目 5**でなく、**項目 1・2**と重なる点で、これら3都市と別に考える必要がある。

但し、表一1の値に依ると、Ⅲ類の4都市の関係は一定しない。〈ダライ〉が関係するため、**項目 3**では熊本市と鹿児島市、**項目 5**では福岡市と長崎市は近似した値を示す。しかし、**項目 1**では福岡市と熊本市、**項目 2**では長崎市と熊本市が近似した値になる。また[32]項の如く、熊本市は宮崎市、鹿児島市は大分市に近似することが多い。これもまとまりの弱いⅢ類所属の4都市の関係のあり様の一端を示している。

[43]Ⅳ類の北九州市は、Ⅲ類の福岡市と同じまとまりであることは、[32]項でも述べ、更に図一Aに示した如く一貫した変化の方向性で結び付けられる関係にあることから問題ない。

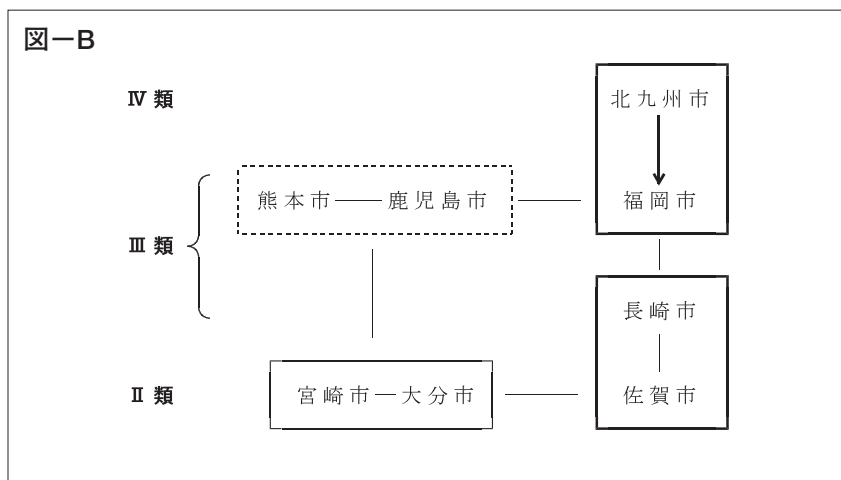
なお、北九州市は、対象外の熊本北部と同一の区分のあり方で、ともに**項目 3**と**項目 5**が区分される。ただ、地理的な距離の大きさを物語るように30%以上の言い方に若干出入りがある。**項目 1・2**で共通する言い方がともに〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉、**項目 3・5**の言い方も一致するが、**項目 4**で北九州市は〈シャーシイ〉、熊本北部は〈セカラシイ〉である。福岡県の場合、**項目 4**で〈セカラシイ〉が30%以上となるのは、筑後北部と筑後南部である。

ただ、区分のあり方でなく、特定項目の言い方の問題であるため、福岡市・北九州市・熊本市・熊本北部に共通する祖型を想定することは容易である。

[5]5項目の区分のあり方を基本としながら、九州7県の8主要都市を分類・位置付けると、次頁の図一Bの如くである。

縦に区分のあり方による3分類、横に**項目 3**と**項目 5**を〈ダライ〉で言い分けるか否かで二分した。そして、都市間の遠近関係を3種類の囲み枠の違いで示した。そして、最小のまとまりとして、[北九州市・福岡市][熊本市・鹿児島市][長崎市・佐賀市][大分市・宮崎市]の4グループを考える。更にこれ





- ・熊本市・鹿児島市・宮崎市・大分市・北九州市・福岡市 など、囲み枠の違いは阿都市間の遠近関係に対応し、順に近接性が高まる。
- ・北九州市と福岡市を結ぶ矢印は、図一Aと同じくある変化を想定して移行する方向にあることを示す。

らは、その上位のグループとして「北九州市・福岡市」「長崎市・佐賀市」の  
まともりと「熊本市・鹿児島市」「大分市・宮崎市」のまともりを考える。〈ダ  
ルイ〉によって項目3と項目5の区分が決定され、対象とする都市すべてが地  
理的に合理性を有する形で二分されることの意味は大きい。

なお、囲み枠の違いで示したが、特に熊本市・鹿児島市のまとまりは、他に比べて近接性が落ちる。これは鹿児島市で**項目 4**に言い方が存さず、参考の区分で検討したという作業上の問題も関係する。

[51] 県単位の分類と比較すると、長崎県・長崎市で異なり、県単位では福岡県と同グループであったが、市単位では佐賀市と同グループになる。

これは、32 章 [222] 項で述べた如く、[項目 1・2 対 項目 3 対 項目(4) 対 項目 5] の県全体と [項目 1・2・3 対 項目 4 対 項目 5] の長崎市の如く、項目 3 によって区分のあり方が異なる上、県単位では項目 4 を除く 4 項目で検

討したことも関係する。

このように同一データに基づいたものでないが、その他の県でも県全体と県庁所在地の違いは存しても小さなものである。このため、県全体の分類と都市単位の分類がほぼ一致するのも当然であろう。

なお、本稿では、山県（2011・12）の図一1の如き5グループの関係図は示さない。都市間の違いが大きく、実際に観察された各都市のあり方について、一貫した変化の方向性によって先後関係を考えることができないためである。幾つかの段階を設け、それぞれに共通する祖型を想定して、階層的に捉えなければ、福岡市と北九州市を除く各都市は関連付けることはできない。

[52] 観察された各地域の区分のあり方を尊重して各地域の関係を考える立場からすると、福岡県内7地域も、九州7県8主要都市の場合に倣い、〈ダルイ〉による項目3と項目5の区分に基づいた、より上位のグループを考える必要がある。

即ち、図一Aに示した5グループは、[北九州市・筑紫域][福岡市][筑後南部][筑後北部]のまとまりと[筑豊西部・糟屋域]のまとまりに二分されることになる。更に福岡県7地域のうち、5地域に認められた系統関係は、九州7県では認められないため、別の形で考慮する必要がある。

#### 4. おわりに

[1] 本稿は、福岡県内7地域及び九州7県の8主要都市それぞれにつき、不快感を表す5項目の代表的な言い方の使われ方によってその地域差の実態を考察、報告することを目的とした。

この場合、基準とする使われ方とは、これまでの論考の如く、各項目を独立したものとして捉え、それぞれの代表的な言い方の回答率が地域ごとにどのように異なるかでなく、ある項目がどのような言い方によって専ら言い表されるか、また複数の項目がどのような言い方によってどのように共通して言い表さ

れるかという、対象 5 項目の区分のあり方が地域ごとにどのように異なるかである。

その結果、観察される区分のあり方やそれに関わる言い方に基づいて、福岡県内 7 地域及び九州 7 県の 8 主要都市につき、その遠近関係を考慮して階層的にまとまりを考えると、次の如く分類される。<sup>注(13)</sup>

1. 福岡県内 7 地域＝[筑豊西部・糟屋域] 対《[[福岡市] 対 [北九州市・筑紫域]] 対 [[筑後南部] 対 [筑後北部]]》
2. 九州 7 県 8 主要都市＝[[北九州市・福岡市] 対 [長崎市・佐賀市]] 対 [[熊本市・鹿児島市] 対 [大分市・宮崎市]]

この分類は、Ⅱ類～Ⅳ類の 3 分類を基本にしながら、最も近接する地域どうしであるか否かで最低 2 地域をまとめ、更に項目 3；雨夜の出迎えと項目 5；疲労感の区分などを加味して定めたものである。本稿などの依る調査に基づく、当該地域における地域差の実態の一つとなる。

なお、福岡県は、関係する言い方の違いが小さいため、ある一貫した変化の方向性によって移行したと考えられるグループが存在する。これは、図一Aに [北九州市・筑紫域] を起点にして [福岡市] [筑豊西部・糟屋域] を結び付ける形で示した。しかし、この点は、九州 7 県の 8 主要都市で問題にできなかったため、上記の分類では考慮していない。「1. 福岡県内 7 地域」でわずかに [北九州市・筑紫域] から左方へ向かう流れ（[北九州市・筑紫域]→[福岡市]→[筑豊西部・糟屋域] という並べ方）に示しただけである。

[2] 福岡県内 7 地域のうち、次の 4 地域について県内での位置付けが問題となる。

①北九州市・筑紫域

②筑後北部・筑後南部

北九州市・筑紫域は、観察される区分のあり方などにおいて県内で最も古態を示す枠組み、筑後北部・筑後南部は県内でも地域の固有性・独自性が際立ち、他 5 地域と別系統にあると考えた。いずれも福岡県内で特徴を有する。論中十

分述べられなかった点を以下補う。

[21] 北九州市と筑紫域は、Ⅳ類として県内で最も5項目を区分する地域であり、また一貫した変化の方向性を考えたとき、福岡市・筑豊西部・糟屋域のあり方の起点になるあり方である。

このため、5地域のあり方を比較して最も古態を示すとまとめた。

この両地域以外で近接するのは、筑豊西部と糟屋域、筑後北部と筑後南部など、地理的に隣接する地域どうしである。この点で、北九州市と筑紫域は県内で例外的なまとまりとなる。このように地理的に隣接しない地域どうしがまとまるのは、別々の地で相対的に古態を残したためであると解釈できる。但し、両地域は対等でなく、一貫した変化の方向性として筑紫域のあり方から全国共通語〈メンドークサイ〉の増加によって北九州市のあり方に至るため、筑紫域の方が北九州市より前の段階を示す。

以上の関係は、23頁の図一Aで北九州市・筑紫域を起点とした矢印によって5地域を関連付けて示した。しかし、これは、調査によって得られた地域ごとの区分のあり方を相互に比較し、全国共通語・新方言の増加、伝統的方言の減少を考えたとき、福岡県内8地域は関連付けられるか否か、関連付けられるなら、どのように結び付くかという観点による検討結果である。福岡県で過去実際に生じたことばの変化とは異なる。

山県（2012）では、項目4；**落ち着きのない子供の〈シャーシイ〉**によって僅かな差は存するものの、福岡市・北九州市が福岡県で最も平均的なあり様を示すと述べた。本稿でも図一Aの如く北九州市の次に福岡市が位置し、31章

[5] 項で同一の結果が得られたことを取り上げた。しかし、前稿では、筑紫域が県内で特徴的な位置にあることは触れなかった。考察の観点が異なるためだけでなく、前稿で見落としがあったのかもしれない。再度項目ごとの検討によって当地域がどのような特徴を有するか、考え直す必要がある。

[22] 山県（2012）と同じく本稿でも筑後北部・筑後南部の両地域は福岡県内

諸地域の中で特異性を有することを示した。

また、これ故に両地域は図一A の如く系統的に別存在であると判断した。

これは、福岡県外の諸地域で大きな問題となる事項、言い方を変えれば、福岡県内ではあまり問題にならない事項が、筑後両地域で問題になるためである。即ち、福岡県内 5 地域が同系統として関係付けられたのは、当該地域には伝統的方言が殆ど見られず、基本的に全国共通語・新方言が対象になって、これらの回答率の違いで項目の区分のあり方が決まったためである。また伝統的方言は〈シャーシイ〉が北九州市・筑紫域の項目 4 に見られるだけで、他の項目に見られず、項目の区分に関係しなかった。

これら 5 地域に対し、筑後北部は〈シャーシイ〉が項目 1・2・3 に共通し、筑後南部は〈セカラシイ〉が項目 1・2・4 に共通した（もし筑後北部で〈シャーシイ〉が項目 4 でも 30% 以上であれば、北九州市・筑紫域と関連付けることも可能）。更に〈セカラシイ〉は、筑後南部以外は、筑後北部で項目 4 に見られるだけである。この項目 4 〈セカラシイ〉の存在が伝統的方言における筑後両地域の唯一の共通点であることが、逆に両地域の関係付けを難しくしている。

或いは、他の地域で〈セカラシイ〉〈シャーシイ〉が 20% 台となる場合を取り上げると、違ったところが見えてきたかもしれない。

ただ、福岡県外に目を転ずると、地理的に隣接する佐賀東部で〈セカラシイ〉が項目 1・2・3 で共通し、〈シャーシイ〉が項目 2 に見られる。このため、筑後両地域は、地域的な位置付けをする際には、佐賀県の周辺地域として考える必要がある。

[3] 九州 7 県の 8 主要都市は、相互の関連付けに至らず、2 都市の組み合わせを基本にした 2 群 4 グループを示すに留まった。

これは地域差の大きさが原因である。特にその大きさは、前項で述べた如く複数の項目に共通する伝統的方言を有する都市と有さない都市の差にある。

例えば、用法的に類似する〈セカラシイ〉と〈ヤゼイ〉を有する佐賀市・長崎市のまとまり、〈ヨダキイ〉を有する大分市・宮崎市のまとまりは、ともに各まとまりの中で比較的近い段階に祖型を想定することができる。しかし、九州内の都市であるとは言え、この二つのまとまりの間に祖型を想定して、関係付けることは、5項目で検討する本稿の限りでは難しい。

一方、鹿児島市は、〈テソイ〉という鹿児島県に特徴的な言い方が見られる。しかし、本稿の項目が〈テソイ〉の用法を覆っていないためか、**項目3；雨夜の出迎え**だけで、他項目と共通することがない。更に本市は**項目4；落ち着いた子供**で対象となる言い方が存しないことが加わり、結果的に区分のあり方を特徴の少ないものにした。

同じまとまりとした熊本市は、**項目4**に〈セカラシイ〉を有し、筑後北部に通ずるところがある。しかし、これも本項目だけに見られる言い方であるため、区分に関わらない。このため、本市も特徴が少ない。

区分のあり方は、鹿児島市が参考のⅢ類ながら、熊本市と同一である。しかし、両市は、他に近似する都市がそれぞれ見当たらず、消去法で結果的に同じまとまりになったと言えなくない。更にいずれも区分に関与しないとは言え、両都市を特徴付ける〈テソイ〉〈セカラシイ〉を有する。このため、これらを欠く祖型を想定すれば、両市は簡単に関連付けられる。しかし、その祖型は関係付けのための作業仮説に過ぎないことは否定できない。

[31] 県全体のあり方と県庁所在地の傾向を比較し、前者の意味するところを考察し、各県内での県庁所在地の位置付けを行うことを試みた。

福岡市・長崎市・大分市はやや一致度が落ちるものの、県全体のあり方は各都市の傾向とほぼ一致する。これは、これら3都市も県全体と区分を異にするのは1項目に過ぎず、更にそれに関わる1語の回答率が県全体か当該都市で5%未満の範囲で基準回答率30%に達しないためである。しかし、このような微妙な差が生じたのは、大分市を除くと、これらの都市の回答者が県全体に

占める割合が必ずしも高くないことも一因であるが、これら3県で区分に関わる言い方に県内差が存することは大きい。

一方、一致度の高い4都市は、県庁所在地を含めた周辺の諸地域や県全体に地域差が小さいことが要因である。更に鹿児島市の如くその回答者の県全体に占める割合が高いこともある。ただ、このように県全体と県庁所在地が区分のあり方でほぼ一致するとは言え、鹿児島県は例外的で、殆どの場合、県全体のあり方は県庁所在地を含む県内諸地域の平均的なものを反映している。

従って、これまでの論考で繰り返し述べた予測、即ち、県庁所在地の回答者の多さのため、県全体のあり方は県庁所在地の傾向を反映しているのではないかは、殆どの場合、当たっていない。

[32] 山県（2014）で示した各県庁所在地の特徴・性格が区分のあり方にどのように見られるかを検討することで、別に県内での位置付けを試みた。

前稿の特徴・性格とは、個々の言い方でなく、全国共通語・新方言・伝統的方言ごとに言い方をまとめて検討したとき、いずれの回答率が5項目を通して高いか低いか、回答状況の一貫性を問題としたものである。

佐賀市・長崎市・宮崎市は、全国共通語や伝統的方言が一貫して回答率が高く、県内諸地域と傾向が異なるとして前稿では立項して説明した。しかし、項目の区分のあり方には、〈セカラシイ〉〈ヤゼイ〉〈ヨダキイ〉が関わるだけで、全国共通語の回答率が項目を通して高くても、殆どの場合、ある項目だけに見られる言い方として表-1の「+」の値を高くすることに関係する程度であった。

勿論、福岡県の如く他の6県でも県内諸地域の区分のあり方をすべて記述して比較を行えば、本稿の観点からも県庁所在地の特徴や性格が捉えられたかもしれない。違いの小さい隣接地域との比較を中心にしたことが、県庁所在地の位置付けが不十分に終わった一因である。しかし、次項に述べる如く、項目の区分のあり方という観点自体の問題も原因として小さくない。

〔4〕項目の区分に関わる地域差の検討は、地域差のあり様を巨視的に捉える場合に有効である。

このため、山県（2011・12）では問題が顕在化しなかった。しかし、本稿の如く、県内差など、より細かな地域差を検討する際には、僅かな差異が掬い上げられず、不十分なままに終わることがあった。特に筑後両地域の関係や福岡県内での位置付けが説明できなかったのは、本稿で採った観点が方法として目が粗かったためである。この点で山県（2012）・山県（2014）などの項目ごとの検討に基づく報告の前に本稿をなし、巨視的に地域差を示して、詳細な記述のための指針とすべきであったと反省する。

特に図一Aとして示した福岡県7地域の関係は、微を穿ちすぎて全体を見失うことのあった山県（2012）に対しては、地域差を考える枠組みとして必要なものであった。

そこで、最後に本稿の原点に立ち戻り、今後の課題を述べる。

〔41〕本稿は、対象とする地域はともかく、5項目の区分のあり方に基づく地域差を明らかにすることを第一の目標とした。

この地域差は、複数の項目で一定以上の回答を有する言い方が地域によってどのような異なりを持って使われるかを記述することによって見出されるものである。即ち、根本的には、不快感を表す言い方の持つ用法が地域によってどのように異なるかに原因することばの問題である。

この点に論中触れることはあった。しかし、用法の違いの存在を指摘するだけで、詳細な記述に至らなかった。そこで、本稿を踏まえた別稿では、複数の項目で使われる7語の用法について、詳しく論ずる。更にこれら7語のうち、**地域固有形式**と言える〈セカラシイ〉〈ヨダキイ〉〈ヤゼイ〉や〈シャーシイ〉は、特定の地域において複数の項目で共通して使われたり、ある項目だけで専ら使われたりして区分のあり方の地域的な違いに深く関係した。本稿の依る調査の5項目の限りで、中心的用法・周辺的用法を明確に示し、再度用法上の地



域差を捉える。

〔42〕本稿で扱った5項目で、複数の項目に共通することのない言い方も少ない。

例えば、鹿児島市の〈テソイ〉は**項目3**に見られるだけであった。これは、5項目による捉え方の限界を示す。それぞれ近接した用法を考え、項目を設けると、複数の項目に跨がることが予想される。即ち、本稿などが依る調査は、不快感という意味の枠組みを捉えようとするには、項目の数が少なく、花岡(2002)の如き体系性・網羅性を有さないという、構造的な問題を有する。

従って、前項の如く残された課題で明確なものは別にして、今後は特定地域に限定して問題となる言い方の意味・用法を詳細に記述する必要がある。即ち、多くの項目を対象とする現地調査に移行すべき時期に来ている訳である。

### 【引用文献・参考文献】

- 九州方言学会（1991）『九州方言の基礎的研究・改訂版』（風間書房）
- 陣内正敬（1990）「語の意味・用法のゆれと意味変化 —博多方言「しろしい」の場合—」『国語学』-160
- 花岡健吾（2002）「広島県大竹市方言における疲労感を表す形容語彙」『國文学攷』-175
- 山県 浩（2006）「福岡県の若年層に見られる不快感を表す形容語 —〈ウザイ〉を中心に—」『福岡大学日本語日本文学』-16
- （2007）「九州・山口方言の若年層に見られる不快感を表す形容語」『福岡大学研究部論集・人文科学編』6-8
- （2009a）「九州・山口地域を中心とする【救急絆創膏】を表す言い方—大学生の実態—」『福岡大学人文論叢』41-2
- （2009b）「九州・山口8県における【絆創膏】を表す言い方 —大学生の実態—」『福岡大学人文論叢』41-3
- （2010）「福岡県を中心とする【救急絆創膏】【絆創膏】を表す言い方—中年層

の実態—」『福岡大学研究部論集・人文科学編』10-7

—— (2011・12)「九州・中国8県における不快感を表す形容語(上)(下) —大  
学生の実態—」『福岡大学人文論叢』43-3・43-4

—— (2012)「福岡県における不快感を表す形容語 —大学生の実態—」『福岡大学  
人文論叢』43-3

—— (2014)「九州・山口7県における不快感を表す形容語の県内差 —大学生の  
実態—」『福岡大学研究部論集・人文科学編』13-4

## 注

(1) 山県(2012)・山県(2014)では、**共通語的形式・地域固有形式**など、特徴を有する言い方を中心に地域差を考えた。即ち、ある項目において県・地域ごとに見たとき、回答の多い言い方は何か、その次に多い言い方は何か、或いは少ない言い方は何かなどを積み重ねることによって地域差を考えた。従って、特定の項目における、ある言い方の有無・多少が問題となる。

一方、本稿や山県(2011・12)では、結果的に、県・地域ごとにある言い方がある項目だけで使われるか、別の項目でも一定の回答で使われるかなど、用法の違いを問題とする。

即ち、項目の区分のあり方と称して、ある項目がどのような言い方によって専ら言い表されるか、また複数の項目がどのような言い方によってどのように共通して言い表されるかを問題とし、特に、後者、項目の重なりを重視する。

ただ、これも対象5項目を関連付ける方途の一つである。地域差から離れ、特定の地域に限定して5項目の関連付けに特化した考察も必要である。

なお、これまでも論考と同じく本稿でも項目を主体に論を進める。このため、諸形式に対応するのは、「意味」でなく、どのような不快感の性格や原因によって想起される言い方であるかに該当する「用法」である。

これは、本稿などの依る調査が、ある意味を有する言い方がある場面(ある不快感を生じさせる状況下)でどのように使われるかを問う質問形式を採っているためである。意味に立ち入らない訳ではないが、煩瑣を避けるため、どの項目で使われることが多い

かなどによって問題の言い方の中心的・周辺の用法を考える。

(2) 本稿でも、これまでの論考と同じく「回答率」に基づいて考察する。

この「回答率」とは、ある県・地域の回答者全体に対して該当の言い方を回答した者の占める割合（百分比・%）で、論中、小数点以下第一位まで示す。

3章で詳しく述べるが、対象とする 18 地域で 30% 以上の回答率を有する言い方を一律に対象とする。

(3) 県全体の回答者に占める、県庁所在地の回答者の割合は、次の如くである。最低値と最高値に約 10% もの違いがあるため、県全体のあり方への関係の仕方にも県差があると予想される。

福岡市 = 27.0%	佐賀市 = 30.6%	長崎市 = 32.0%
熊本市 = 34.8%	大分市 = 37.4%	宮崎市 = 37.1%
鹿児島市 = 37.8%		

(4) 5 項目の関係は、すでに山県（2011・12）・注(12)で詳しく述べたが、再度説明する。

即ち、不快感が肉体的なものであるか精神的なものであるかで、**項目 5** と他の 4 項目が区分される。次に自身の行動が関わる、したくない気持ちであるか、自身の行動を伴わない純粋に気持ちの問題であるか、また不快感の原因が具体的に今まさに目に見えるか否かによって、**項目 3** と他の 3 項目に区分される。そして、精神的な不快感であるか、何らかの感覚器官が関わる不快感であるかで、**項目 2** と他の 2 項目が区分され、2 項目は、触覚・視覚に関わる**項目 1** と聴覚・視覚に関わる**項目 4** に分けられる。

このように想定される 5 項目の階層性は、県単位での区分のあり方（山県（2011・12）・4 章 [33] 項）や福岡県内の地域差のあり様（山県（2012）・4 章 [3] 項）でも確認され、妥当なものである。

(5) 回答者 139 名の福岡市と 26 名の宮崎市を同じ百分比で比較するため、福岡市で 36 名・25.9% の言い方（**項目 4** 〈ウルサイ〉）も、宮崎市で 7 名・26.9% の言い方（**項目 4** 〈ユーウツ〉）も同じく対象外となる。対象の言い方になるには、福岡市では 6 名も足りず、宮崎市では 1 名足りない。

これは回答者の最も多い地域と最も少ない地域を比較した場合で、極端な例である。しかし、考察に当たってはこのような問題があり、30% という基準回答率だけで判断することは、危険である。そこで、これまで同様 20% 台の言い方にも配慮して、考察を行う。

(6) 山県 (2011・12) において、九州7県及び山口県・広島県の全体的な傾向を捉えるため、各項目を代表する言い方として、当該9県全域で回答率が高く、広く使われている言い方＝**共通語的形式**と特定の県で回答率が高く、地域的に特徴的である言い方＝**地域固有形式**を次の如き基準で定めた。

**A1. 共通語的形式**；9県中7県以上で30%以上の回答率を有する言い方

**A2. 準共通語的形式**；9県中5・6県で30%以上の回答率を有する言い方

**B1. 地域固有形式**；ある1・2県で50%以上の回答率を有する言い方

但し、その他の県は、**B2. 準地域固有形式**を除き、20%未満の回答率である。

**B2. 準地域固有形式**；ある1・2県で30%以上50%未満の回答率を有する言い方

但し、その他の県は、**B1. 地域固有形式**を除き、20%未満の回答率である。

この基準に依ると、項目ごとに次の如き言い方が**(準)共通語的形式**・**(準)地域固有形式**に該当する。

4項目で**(準)共通語的形式**は延べ10語、**(準)地域固有形式**は延べ12語存在する([ ]内は、**(準)共通語的形式**の場合、30%以上となる県の数と外れる県名、**(準)地域固有形式**の場合、条件に当てはまる県名を示した)。

下線の言い方が、本稿で対象とする、〈シャーシ〉を除く6語である。

#### 項目1；前髪掛かり

**A1. 共通語的形式**；ウザイ[全9県]・ジャマ(イ)[全9県]・ウットーシイ[8県、除；佐賀県]

**B2. 準地域固有形式**；セカラシイ[佐賀県]・ヤゼイ[長崎県]

#### 項目2；長雨続き

**A1. 共通語的形式**；ウザイ[8県、除；大分県]

**B1. 地域固有形式**；タイギ[広島県]

**B2. 準地域固有形式**；セカラシイ[佐賀県]・ヤゼイ[長崎県]・ヨダキイ[大分県・宮崎県]

#### 項目3；雨夜の出迎え

**A1. 共通語的形式**；メンドイ[7県、除；大分県・宮崎県]・メンドークサイ[7県、除；鹿児島県・広島県]

**A2. 準共通語的形式**；ダルイ[6県、除；福岡県・佐賀県・長崎県]

**B1. 地域固有形式**；タイギ[広島県]・ヨダキイ[宮崎県]

**B2. 準地域固有形式；**セカラシイ〔佐賀県〕・テソイ〔鹿児島県〕・ヨダキイ〔大分県〕

**項目 4；**落ち着いたくない子供      なし

**項目 5；**疲労感

**A1. 共通語的形式；**ダルイ〔全 9 県〕・ツカレタ〔全 9 県〕・キツイ〔7 県、除；鹿児島県・広島県〕

**B1. 地域固有形式；**エライ〔山口県〕・タイギ〔広島県〕

**B2. 準地域固有形式；**ダレタ〔宮崎県・鹿児島県〕

山県（2011・12）では、**項目 4** には上記の条件を満たす言い方が存しないため、対象外とし、4 項目の区分のあり方を検討した。これは、対象とする諸県を同一条件で比較するためであった。しかし、当該諸県すべてで**項目 4** に 30% 以上の言い方が存しない訳ではない。本稿では、項目の区分のあり方を問題とするため、**項目 4** は、30% 以上の言い方を有する場合は当然、有しない場合も、20% 台の言い方を参考として取り上げ、他の 4 項目と併せて検討する。

（7）同じ区分のあり方でも、項目の組み合わせが異なる点を考慮して、複数の項目が特定の言い方によって直接的に一体化するか、複数の言い方の連鎖によって一体化するかを考慮して、次の如く項目の重なりを段階的に捉えることも可能である。

この場合、〔 〕が最小で、最も近く、密接な第一次のまとまりを示し、以下、【 〃 】が第二次のまとまり、《 》が最大で、最も遠く、緩い第三次のまとまりを表す。

## Ⅱ' 類

糟屋域；【〔1・2〕 対 〔1・4〕】 対 〔3・5〕

筑豊西部；【〔1・2〕・4〕 対 〔3・5〕

筑後北部；《【〔1・2〕・3〕 対 〔1・4〕》 対 5

## Ⅲ' 類

福岡市；〔1・2・4〕 対 3 対 5

筑後南部；【〔1・2〕・4〕 対 3 対 5

## Ⅳ' 類

筑紫域；〔1・2〕 対 3 対 4 対 5

北九州市；〔1・2〕 対 3 対 4 対 5

**Ⅳ' 類**の筑紫域と北九州市を除くと、同一の組み合わせは存在しない。

ただ、このまとめ方を本論で扱わないのは、山県（2011・12）との比較を考えたこと

もある。しかし、第一の理由は、糟屋域・筑後北部の如く橋渡しとなる項目（両地域とも**項目1**）を別のまとまりに所属させ、対立させる図式になるためである。

例えば、糟屋域の場合、**項目1・2**が〈ウザイ〉で共通し、**項目1・4**が〈ウットーシイ〉で共通するため、結果的に**項目1**をそれぞれのまとまりに配し、別々のまとまりで同じ**項目1**を対立させることになる。勿論、各項目の重なりが段階的に捉えられることは重要である。ただ、このように細かい分類が地域差の実態を記述するため、どのくらい必要であるかも考え、このように注で示すに留める。

（8）筑後南部は、筑後北部に比べて特異性が低く、福岡市の実態に近いため、**Ⅳ類**の北九州市・筑紫域からの変化が可能のように見える。

しかし、北九州市のあり方から考えても、**項目1**での〈シカラシイ〉の増加、**項目4**での〈シャーシイ〉の減少と〈セカラシイ〉の増加など、伝統的方言の増加を想定しなければ、至らない。

（9）**Ⅳ類**の北九州市と筑紫域の違いは、**項目3**〈メンドークサイ〉の有無（実際は約5%の回答率の差）に過ぎない。従って、福岡県5地域間の一貫した変化の方向性という点から、全国共通語〈メンドークサイ〉の増加によって**Ⅳ類**内では筑紫域から北九州市へ移行したと考え、図にもそのように矢印を施した。

（10）福岡県全体では、**項目1**に固有な言い方として〈ジャマ（イ）〉が存する一方、**項目1・2**で〈ウザイ〉〈ウットーシイ〉が共通するため、両項目がまとまる。**項目3**は〈メンドイ〉〈メンドークサイ〉、**項目5**は〈キツイ〉〈ツカレタ・ダルイ〉でそれぞれ特立する。

これに対して、福岡市は、論末・図-11の如く、**項目4**を除くと、**項目5**で〈シンドイ〉が30%以上で加わる点が県全体と異なる。

北九州市・筑紫域は、論末・図-13・14の如く、**項目4**を除くと、筑紫域は**項目3**〈メンドークサイ〉を欠くため異なるが、北九州市は県全体と各項目で言い方が完全に一致する。

以上の如く、**項目4**を除く4項目で福岡県全体と福岡市・北九州市を比べると、区別のあり方で違いはなく、各項目の言い方で福岡県全体と北九州市が一致する。

（11）論末・図-16の如く、筑後北部は**項目1・2・3**が〈シャーシイ〉で共通する一方、**項目1・4**が〈ウットーシイ〉で共通する、間接的なまとまりである。

〈セカラシイ〉が関与する点で筑後南部の方が佐賀市に近いところがある。しかし、筑

後南部は、項目 1・2・4 が〈セカラシイ〉で共通し、項目 3 は外れる。また項目 3 〈セカラシイ〉は 6 名・14.0% に過ぎず、佐賀東部の項目 4 ほど際どい値ではない。

なお、これは、肥筑地域における〈セカラシイ〉の用法の違いで、別稿で詳しく論じる問題の一つである。

(12) 長崎県の複雑な地形のためもある。長崎市と中部は一部で隣接するが、隣接しない地域も少なくない（山県（2014）・注(2)参照）。

即ち、「長崎中部」とは、長崎県の中央部にある地域の謂で、長崎市の北に位置する西海市・西彼杵郡の他、大村湾で隔てられた大村市・東彼杵郡を含む。

一方、〈ウザイ〉〈ヤゼイ〉の回答状況で長崎市と同傾向を示す南東部は、諫早市が長崎市と接する。しかし、長崎市に接しない島原半島の島原市・雲仙市・南島原市を含み、事情は中部と変わらない。

東南部 22 名の区分のあり方は、[項目 1・2・3・4 対 項目 5] である。項目 4 で〈ヤゼイ〉〈セカラシイ〉が 30% 以上となり、4 項目が〈ヤゼイ〉で共通する。項目 4 〈ヤゼイ〉が 27.8% であった長崎市のあり方を更に推し進めたもので、先後関係が認められる。

佐世保市を中心とする北部 22 名は、〈ヤゼイ〉が全項目で 30% 以上になることはなく、項目 1・2 が〈ウザイ〉で共通するⅡ類である。

(13) 注(6)と同じく、[ ] が最小で、最も近い第一次のまとまりを表し、以下、【 】 が第二次のまとまり、《 》 が最大で、最も遠い第三次のまとまりを表す。

線状に地域を並べたため、例えば、福岡県内の場合、最左方の「筑豊西部・糟屋域」と最右方の「筑後北部」が最も遠い関係のように見える。しかし、実際は図一A・B のような遠近関係を考える。

ここでは、図に示しがたい、各地域・都市の関係を階層的に示すことを第一の目的にした。図一A・B と目的が異なるため、最終的には両者を併せて、本稿における、福岡県内 7 地域及び九州 7 県 8 主要都市の地域差の実態を理解されたい。

## 図一1～7

不快感に関する 5 項目につき、回答率 30% 以上の言い方が各項目にどのように現れるか、福岡県内 7 地域（図一11～17）及び九州 6 県の県庁所在地（図一2～7）ごとに示したもの。特にある言い方が複数の項目に共通して見られる（=30% 以上となる）場

合は、項目を重ねた。

## 資 料

本資料は、対象 18 地域で回答率 30% 以上となる言い方を回答率とともに記したものである。回答率 30% 未満の言い方は、山県（2012）・山県（2014）の別表を参照のこと。

- ・ 県名・地域名の後の数値は、それぞれの回答者数である。
- ・ 回答率の前に付した「\*」「\*\*」は、各県全体の回答率を比較値とする検定（母比率の検定[片側検定]）を行って有意差の見られることを意味する（有意水準；1% 水準 = \*\*、5% 水準 = \*）。
- ・ 各地域において複数の項目で回答率 30% 以上となる言い方には下線を施した。
- ・ 鹿児島市・薩摩南部の項目 4 には、回答率 30% 以上の言い方が存在しない。参考のため、20% 台の言い方を回答率の高い順に記した。

### 1. 福岡県＝515

#### 福岡市＝139

項目 1；〈ウザイ〉 58.3%、〈ウットーシイ〉 52.5%、〈ジャマ（イ）〉 43.9%

項目 2；〈ウザイ〉 50.4%、〈ウットーシイ〉 36.0%

項目 3；〈メンドイ〉 63.3%、〈メンドークサイ〉 30.2%

項目 4；〈ウザイ〉 31.7%、〈ウットーシイ〉 30.2%

項目 5；〈キツイ〉 60.4%、〈ツカレタ〉 54.7%、〈ダルイ〉 49.6%、〈シンドイ〉 30.9%

#### 糟屋域＝31

項目 1；〈ウザイ〉 54.8%、〈ジャマ（イ）〉 48.4%、〈ウットーシイ〉 \*32.3%

項目 2；〈ウザイ〉 58.1%

項目 3；〈メンドイ〉 61.3%、〈ダルイ〉 35.5%

項目 4；〈ウットーシイ〉 41.9%、〈シャーシイ〉 32.3%

項目 5；〈ダルイ〉 67.7%、〈キツイ〉 54.8%、〈ツカレタ〉 45.2%

#### 筑紫域＝67

項目 1；〈ジャマ（イ）〉 50.7%、〈ウザイ〉 47.8%、〈ウットーシイ〉 47.8%

項目 2；〈ウザイ〉 49.3%、〈ウットーシイ〉 32.8%

項目 3；〈メンドイ〉 67.2%

項目 4；〈シャーシイ〉 \*41.8%



項目5；〈キツイ〉58.2%、〈ダルイ〉52.2%、〈ツカレタ〉50.7%

北九州市=66

項目1；〈ウットーシイ〉59.1%、〈ウザイ〉51.5%、〈ジャマ（イ）〉43.9%

項目2；〈ウザイ〉40.9%、〈ウットーシイ〉30.3%

項目3；〈メンドイ〉68.2%、〈メンドークサイ〉33.3%

項目4；〈シャーシイ〉30.3%

項目5；〈キツイ〉59.1%、〈ダルイ〉53.0%、〈ツカレタ〉45.5%

筑豊西部=29

項目1；〈ウザイ〉55.2%、〈ウットーシイ〉55.2%、〈ジャマ（イ）〉48.3%

項目2；〈ウザイ〉48.3%、〈ウットーシイ〉34.5%

項目3；〈メンドイ〉51.7%、〈メンドークサイ〉41.4%、〈ダルイ〉31.0%

項目4；〈ウルサイ〉\*41.4%、〈ウザイ〉31.0%

項目5；〈キツイ〉72.4%、〈ツカレタ〉44.8%、〈ダルイ〉41.4%

筑後北部=64

項目1；〈ウザイ〉56.3%、〈ウットーシイ〉43.8%、〈ジャマ（イ）〉42.2%、  
〈シャーシイ〉\*\*39.1%

項目2；〈ウザイ〉42.2%、〈シャーシイ〉\*\*32.8%

項目3；〈メンドイ〉59.4%、〈シャーシイ〉\*\*34.4%

項目4；〈ウットーシイ〉34.4%、〈セカラシイ〉\*\*32.8%

項目5；〈キツイ〉67.2%、〈ツカレタ〉\*65.6%、〈ダルイ〉50.0%

筑後南部=43

項目1；〈セカラシイ〉\*\*48.8%、〈シカラシイ〉\*\*41.9%、〈ジャマ（イ）〉34.9%、  
〈ウザイ〉\*\*32.6%、〈ウットーシイ〉\*\*30.2%

項目2；〈セカラシイ〉\*\*39.5%、〈ウザイ〉\*30.2%

項目3；〈メンドイ〉\*\*37.2%、〈メンドークサイ〉37.2%

項目4；〈セカラシイ〉\*30.2%

項目5；〈キツイ〉60.5%、〈ダルイ〉41.9%、〈ツカレタ〉39.6%

## 2. 佐賀県＝98

### 佐賀市＝30

- 項目 1；〈ジャマ（イ）〉 73.3%、〈ウザイ〉 53.3%、〈セカラシイ〉 43.3%  
項目 2；〈セカラシイ〉 43.3%、〈ウザイ〉 40.0%、〈ウットーシイ〉 30.0%  
項目 3；〈セカラシイ〉 \*56.7%、〈メンドイ〉 53.3%、〈メンドークサイ〉 43.3%  
項目 4；〈セカラシイ〉 40.0%  
項目 5；〈キツイ〉 73.3%、〈ツカレタ〉 56.7%、〈ダルイ〉 33.3%

### 佐賀東部＝27

- 項目 1；〈ウザイ〉 55.6%、〈ジャマ（イ）〉 55.6%、〈セカラシイ〉 37.0%  
項目 2；〈ウザイ〉 48.1%、〈シャーシイ〉 \*\*40.7%、〈セカラシイ〉 37.0%  
項目 3；〈メンドイ〉 63.0%、〈セカラシイ〉 48.1%  
項目 4；〈ウルサイ〉 33.3%  
項目 5；〈ダルイ〉 \*70.4%、〈キツイ〉 59.3%

## 3. 長崎県＝169

### 長崎市＝54

- 項目 1；〈ジャマ（イ）〉 59.3%、〈ウザイ〉 57.4%、〈ヤゼイ〉 38.9%  
項目 2；〈ウザイ〉 48.1%、〈ヤゼイ〉 42.6%、〈ユーウツ〉 33.3%  
項目 3；〈メンドイ〉 50.0%、〈ヤゼイ〉 \*40.7%、〈メンドークサイ〉 35.2%、  
〈ウザイ〉 \*33.3%  
項目 4；〈ウルサイ〉 33.3%  
項目 5；〈キツイ〉 72.2%、〈ダルイ〉 48.1%、〈ツカレタ〉 44.4%

### 長崎中部＝36

- 項目 1；〈ウザイ〉 41.7%、〈ウットーシイ〉 41.7%、〈ジャマ（イ）〉 58.3%、  
〈ヤゼイ〉 30.6%  
項目 2；〈ユーウツ〉 33.3%  
項目 3；〈メンドイ〉 61.1%  
項目 4；〈ウットーシイ〉 30.6%  
項目 5；〈キツイ〉 66.7%、〈ダルイ〉 38.9%、〈ツカレタ〉 38.9%

#### 4. 熊本県=135

##### 熊本市=47

項目1；〈ウザイ〉 57.4%、〈ウットーシイ〉 48.9%、〈ジャマ（イ）〉 38.3%

項目2；〈ウザイ〉 34.0%、〈ウットーシイ〉 31.9%

項目3；〈メンドイ〉 59.6%、〈ダルイ〉 \*48.9%、〈メンドークサイ〉 40.4%

項目4；〈セカラシイ〉 38.3%、〈ウルサイ〉 36.2%

項目5；〈キツイ〉 74.5%、〈ツカレタ〉 55.3%、〈ダルイ〉 \*34.0%、  
〈シンドイ〉 31.9%

##### 熊本北部=34

項目1；〈ウットーシイ〉 50.0%、〈ウザイ〉 41.2%

項目2；〈ウットーシイ〉 38.2%、〈ウザイ〉 35.3%

項目3；〈メンドイ〉 50.0%、〈メンドークサイ〉 44.1%

項目4；〈セカラシイ〉 38.2%

項目5；〈キツイ〉 \*52.9%、〈ダルイ〉 50.0%、〈ツカレタ〉 44.1%

#### 5. 大分県=163

##### 大分市=61

項目1；〈ウットーシイ〉 62.3%、〈ウザイ〉 39.3%、〈ジャマ（イ）〉 31.1%

項目2；〈ヨダキイ〉 49.2%

項目3；〈ヨダキイ〉 44.3%、〈メンドークサイ〉 42.6%、〈ダルイ〉 37.7%

項目4；〈ウットーシイ〉 34.4%

項目5；〈ツカレタ〉 50.8%、〈ダルイ〉 47.5%、〈キツイ〉 31.1%、〈ヨダキイ〉 31.1%

##### 大分中部=41

項目1；〈ウットーシイ〉 73.2%、〈ジャマ（イ）〉 39.0%、〈ウザイ〉 34.1%

項目2；〈ヨダキイ〉 39.0%

項目3；〈ヨダキイ〉 43.9%、〈メンドークサイ〉 39.0%、〈ダルイ〉 36.6%、  
〈メンドイ〉 34.1%

項目4；〈シャーシイ〉 43.9%、〈ウルサイ〉 31.7%

項目5；〈ツカレタ〉 61.0%、〈ダルイ〉 51.2%、〈キツイ〉 36.6%、〈ヨダキイ〉 31.7%

## 6. 宮崎県＝70

### 宮崎市＝26

項目 1；〈ウザイ〉 38.5%、〈ウットーシイ〉 \*73.1%、〈ジャマ（イ）〉 42.3%

項目 2；〈ウザイ〉 34.6%、〈ヨダキイ〉 34.6%、〈ウットーシイ〉 30.8%

項目 3；〈ヨダキイ〉 73.1%、〈ダルイ〉 57.7%、〈メンドイ〉 38.5%、  
〈メンドークサイ〉 38.5%

項目 4；〈ウルサイ〉 42.3%、〈セワシイ〉 30.8%

項目 5；〈キツイ〉 \*61.5%、〈ツカレタ〉 53.8%、〈ダルイ〉 50.0%、  
〈ダレタ〉 50.0%、〈シンドイ〉 42.3%

## 7. 鹿児島県＝217

### 鹿児島市＝82

項目 1；〈ウザイ〉 43.9%、〈ジャマ（イ）〉 42.7%

項目 2；〈ウザイ〉 31.7%

項目 3；〈ダルイ〉 48.8%、〈メンドイ〉 43.9%、〈テソイ〉 42.7%

項目 4；φ（〈ウルサイ〉 29.3%、〈ウザイ〉 26.8%）

項目 5；〈ダルイ〉 54.9%、〈ツカレタ〉 45.1%

### 薩摩南部＝28

項目 1；〈ウットーシイ〉 42.9%、〈ウザイ〉 39.3%、〈ジャマ（イ）〉 39.3%

項目 2；〈ウットーシイ〉 32.1%

項目 3；〈メンドイ〉 57.1%、〈テソイ〉 39.3%、〈ダルイ〉 32.1%

項目 4；φ（〈ウットーシイ〉 28.6%、〈ウルサイ〉 25.0%、〈ヤカマシイ〉 21.4%）

項目 5；〈ダルイ〉 53.6%、〈ツカレタ〉 50.0%、〈ダレタ〉 35.7%

【最終稿 2014 年 9 月 17 日】

図-11 福岡市

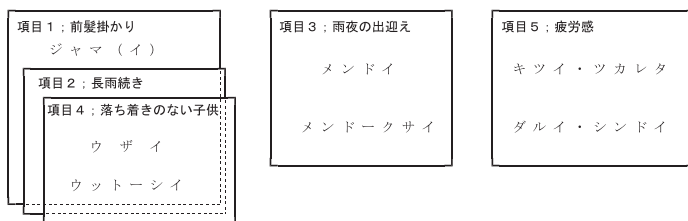


図-12 糟屋域

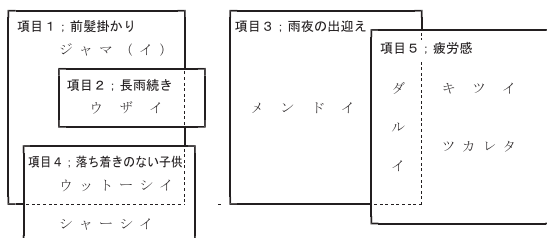


図-13 筑紫域

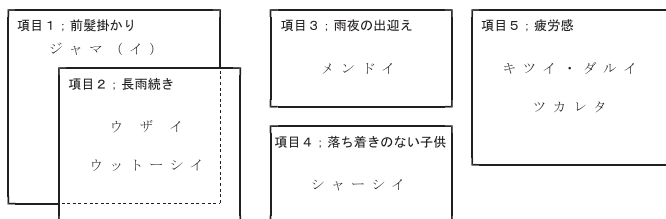


図-14 北九州市

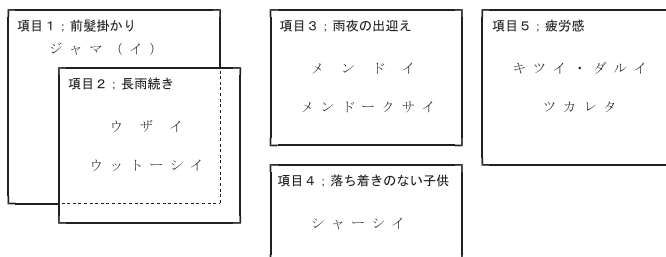


図-15 筑豊西部

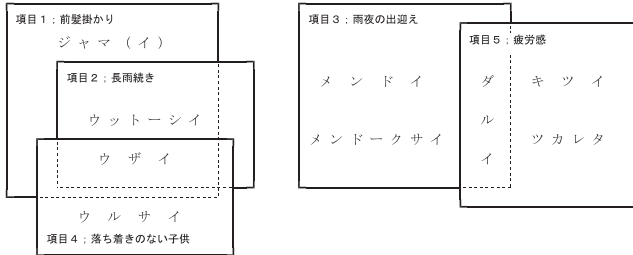


図-16 筑後北部

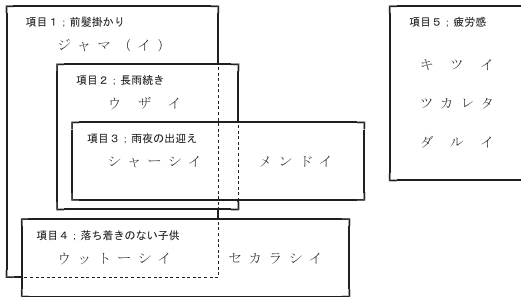


図-17 筑後南部

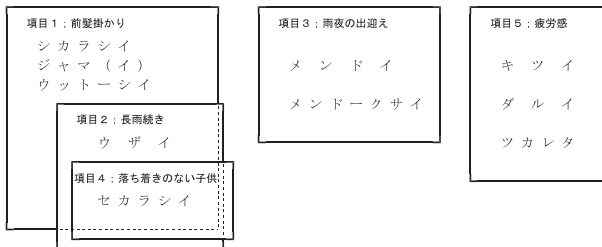


図-2 佐賀市

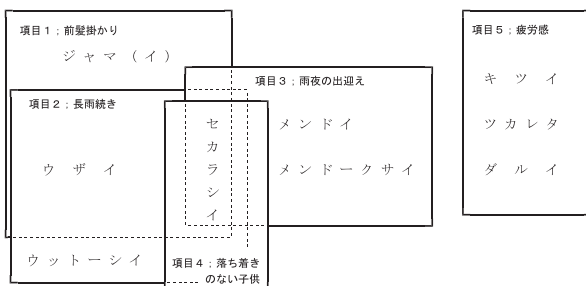


図-3 長崎市

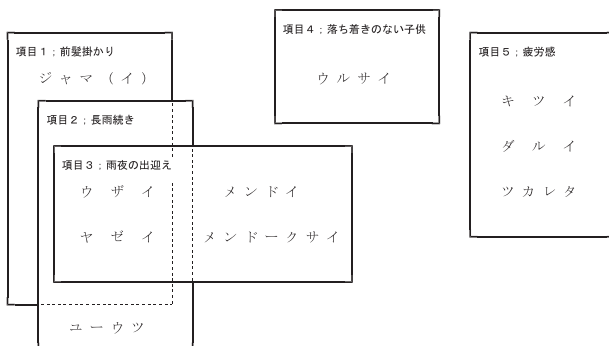
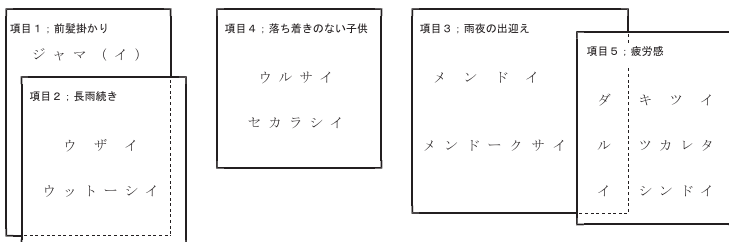
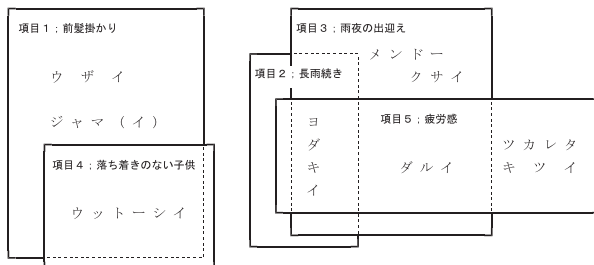


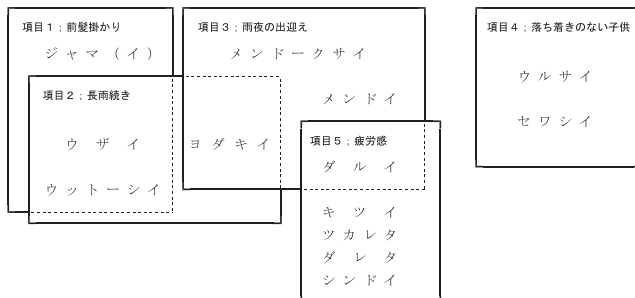
図-4 熊本市



図－5 大分市



図－6 宮崎市



図－7 鹿児島市

